
アシンメトリー

momochan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アシンメトリー

【Nコード】

N0485A

【作者名】

m o m o c h a n

【あらすじ】

ずっと忘れられなかった初彼と再会を果たすミク。彼とは友達でいいと思っていたはずなのに、その気持ちは欲張りな物になっていく。…。(実際にkanaが18歳の時の話を書こうと思います。1人でも共感してくれる人がいるとうれしいな)

手紙。

鳴らない携帯。

もうずっと前に終わったはずの恋。

ずっと忘れていると思ってた。

でも、何で??

ずっとあの人の事だけを考えている様な気がする。

時間が解決してくれると思ってた。

でも何でだろうね。

季節がめぐる度、どの季節の中にも君との思い出が蘇る。

君を好きだった私の記憶。

ずっと胸の中でくすぶっています…。

砂時計は止まったまま。

冷たい季節、確か2月の初めくらい。

私は17歳。

高校2年生だった。

電車で一時間程かけて地元よりちょっとだけ、町の高校に通っている。

授業は何となく寝てて、放課後は趣味のバンド活動かバイト。

自由気ままに好きな事は何でもやってるし親も適当で、そこそこの毎日。

でも、どこかでいつも何かが足りないと感じていた。

心にぽっかり穴があいて、そこだけ何か足りない感じ…。

その理由は自分が一番よく良く知っていた。

【彼にあいたい…。】

私の頭をもうずっと前から過っている言葉だった。

2年も前に別れてしまった恋人“リュウタ”。

あの頃の私にとって、それはあまりにも昔の事だったが、何故か忘れられないまま2年が過ぎていた。

「何か良いことないかな？」

毎日毎日口癖の様につぶやいている。

彼に別れを告げたのは自分のはずだったのに、今も記憶の中で確かにリュウタは存在していた。

リュウタと別れて、新しい町で沢山の出会いや楽しい事が待っているはずだった。

なのに、リュウタのいない毎日は、まるで排気ガスでも吸ってるみたいに息苦しく、私の心はいつも寂しかった。

（もう限界。頭がおかしくなりそう…。）

その頃の私はとても勇気がなくて、普通の女の子なら、すぐに彼に会いに行くだろうに、それさえできなかつた。でも自分でも気付い

ている。

(このままじゃダメ…)

私は携帯を取り出す。ゆっくりとその想いを打ち込んでいった…。

【私、今でもリュウタの事が好きなんだ。他の誰と付き合ってもダメだったよ。今更って言われるかもしれない。でも一回会ってみたんだ。付き合ってたと言わないから。友達としてでいいから…】文字にしてみると、何だかとてもあっけなく思えた。

本当はもっと言いたい事が沢山あるはずなのに、うまく言葉にならなかった。

私はそのメールを、私とリュウタの数少ない共通の男友達でもある“大樹”に送ることにした。

大樹は、同中の同級生で、今でもご飯を食べにいたり、お互いに恋愛相談をする仲だ。

性格としては、少々自分の事で、精一杯という感じもあつたので、あまり期待はしていなかったけど…。

大樹からの変更が来たのはそれから三日後。

【解ったよ。今度リュウタに言ってみるよ。でもアイツ今彼女いるから、あんまり期待するなよ。】

…今彼女がいる。

その事は私も噂で聞いていたので知っている。

私と別れた後、電話をくれたリュウタは、

「お前が忘れられない。やりなおしたい。」
と言ってくれた。

それを断ったのは私。

その直後できた彼女とはもうすぐ二年になるという。

その噂を聞いた時、一度は(良かった…。彼女できたんだ。)と安

心した事もあつたけど、心のどこかでは、(ずっと私を好きでいてほしい…。忘れないでほしい…)と強く思ったのも本音だった。リュウタと彼女が今までどんな時を重ね、どんな言葉を交して来たのか…。

私の時は止まってしまったけど、今も二人の時は動き続けている。あの時いじをはらずにやりなおせたら、私とリュウタは今も隣にいられたのかもしれない…。

私は大樹にメールを返す。

【うん。期待はしない。ただ、会って友達みたいに話せたらいいと思ってるだけ。迷惑かけないし嫌って言われたら、あきらめるから…】

嘘でも言い訳でもない本音だった。

【そっか…。あんまりハマると辛いからな。】

解ってる…。

傷つきたくない。

失いたくない…。

ゼツタイキタイシナイ

今更戻れないし嫌われるのは絶対に嫌だったから。

井戸端会議

その日は突然やってきた。

今日はもうすぐ卒業する先輩達のお別れ会である。

お別れ会と言っても、大きなホールを借りて行われる行事で、各部活がお世話になった先輩達の為に色々とし物を披露する。

演劇やプラスバンド、チア部の発表会みたいなもんで、ろくに部活もやっていない生徒にとっては、その後の飲み会だけが目当てで出席するような会である。

私も例外なくクラスでもやる気のない女子グループに属していたので、もうすっかり井戸端会議の会場と化していた。

グループの中でも男好きでアイドルタイプの“菜穂”は、いい男探しに夢中になっている。

「ねえ！あの先輩超イケ面じゃん！菜穂声かけちゃおっかなあ」

「あんなのがいいなんてあんた最近飢えてるでしょ。あつちの先輩のが素敵〜〜！」すかさず“未織”も男の群れを品定めしている。「アンタ達イケ面なんて死語だよ！！」そんな事を言いながら、クールな“亜子”まで乗り出していた。

「ねえ、ミクはどの人がタイプ？今日は出会い満載の予感だよお！菜穂が瞳を輝かせて背中の中のしかかって来た。」

「…え！？ご、ごめん、聞いてなかった。」

「どうしたの？ミク、今日テンション低いじゃん？てゆうーか最近ずつとじゃん！」

「い、いや、そんな事ないよ！！」あわてて声が裏返る。

それもそのはず。最近の私と言えば、リュウウタの事ですっかり頭がいつぱいなのだ。

大樹からのメールはアレ以来来ていない。

期待なんかしていないつもりだったし、誰かに話してすっきりした
かったただけだし…。

そう自分に言い聞かせていたけど、やっぱり心のどっかで本当は期
待している自分がいる。私の心は大きく揺れていた。

「おつかしーなあ、ミク。いつもならキヤーキヤー言うはずなのに
！！絶対おかしい！！」菜穂がにやついている。

「分かった！好きな人できたんでしよう！！」

「ち！違つよ！そんなんじゃないから！！」

菜穂の言葉に思わず大きな声がでてしまった。（ヤバい！）

「あー！！やつぱりそうなんだ！！誰々！！」

「いや…なんてゆうか、片思いつていうのも違つし…」
言おうか言つまいか一瞬悩んだ。

（でも一人で抱え込める程私は強くなかつた…。）

「実は…。」

はなしちゃつた…。

3人共いつになく真剣に私の話を聞いている。

…。

亜子が優しく言葉を選んで話し出す。

「そつかあ、そんな人がいたのかあ…。でも期待してるからメール
頼んだんでしよう？」

「…。違つ、本当に期待してないし、忘れたいんだけど…。」

「忘れる必要なんてないじゃん！好きな気持ちを伝えて何が悪いの
？あんだ臆病すぎるよ！」菜穂が体を乗り出す。そして何かひらめ
いた様に大きな瞳を輝かせた。

「よし！悩んでても仕方ないし賭けしよつか！！」

「賭け??」菜穂がうれしそうに微笑んだ。

「ウジウジ悩んでずっと待ってても仕方ないしさあ、もしも、今から三十分以内にメールが来なかつたら、その時はもう本当に期待しないで彼を忘れる！そんで今日のお別れ会が終わるまでにカツコイイ先輩見つけて声かけて携帯聞いてくるってのどお!？」

「はあ〜」脱力する三人をよそに菜穂はもういい男探しを再会しようとする気まんまん。

「でもそれもいいかもなあ…。」

「ミク、本気？菜穂にのせられちゃ駄目だっつの！」

「未織つたらひどーい！！いいじゃん、チャンスは逃すなだよお！この後の飲み会でいい先輩捕まえなきゃ！ゆくゆくは大学生の車もちになるんだから！」

その時だった…。

「な！何！？何かガタガタいうよ〜！」菜穂がおしりの下から何かを見つけた。

「やっだー！！誰かの携帯ふんずけてたあ！」

「いいからちよつと貸しなさい！」亜子が携帯を奪い取る。

「あ！！！！」四人は顔を見合わせた。

【リュウタがね、最近彼女とマンネリしてるみたいで、お前の事話したら、会いたいわって言ってたよ。アドレス教えたからな！】大樹からのメール。

私は心臓が止まりそうだった。

（まさかこんなメールが来るなんて全然思ってた…。どうしよう…。）

顔をあげると、三人はにやにや笑っている…。

「ミク今日の飲み会はお留守番だねー」 菜穂が何だかうれしそうだ。

「べ、別に、彼女いるし、そんな意味じゃないよ!」

「そんなの分かんないじゃん。そーゆう事はアタックしてから言うてよね!」

「だって...」 うつぶく私に菜穂は笑顔で言った。

「さっき言い忘れたけどー、もしも三十分以内にメールが来た場合は、絶対その彼ゲットしなきゃ駄目だからね。弱音吐かないの 分かった??」

「う...」

私は菜穂のそういうところがとてもうらやましいかと思った。

かわいくて、明るくて、自称ブリッコなんていっちゃうのに全然嫌みに聞こえない。

好きな人を見つけたら、周りなんて気にしない、自分の気持ちをまっすぐにぶつけられる。

(むろん、嫌いになったらようしゃないけど...)

そんな菜穂を見ているうちに少しは見習って頑張ってみようかなんて思ってしまった。

ゼツタイキタイしない...。

あれほど堅く誓ったのに、たった一つのメールに振り回される。

...それはもう完全に恋の始まり。

diary

リュウタが会いたいです。

大樹からのメールが頭の中をぐるぐる回っていた。

菜穂に言われた事もあって、私はすごく興奮していた。

（リュウタが会いたいですって言うてくれた。やっぱり私リュウタの事好きなんだよな。付き合いたいなんて思わない。でも、彼と再会したら、せめていい奴だな…とかかわいくなつたなとか思われたい。）
その頃の私と来たら、一日中そんな事ばかり考えていた。

そしてその頃から少しずつ昔の日記を読み返しては、リュウタとつき合った中学時代を思い出し、ドキドキして眠れない事が多くなつた。

何冊にも及ぶ、淡くて子供じみた想いが、私の中に再び染み渡っていく。

日記にはリュウタとの始まりも、終わりも細かく毎日しるされていた。

平成9年4月3日

今日は中学の入学式。女子は皆かっこいい男の子に夢中で、でも…何人かいたけどコレと言つてきになる人はいなかったなあ。リュウタっていうすごい嫌な奴がいたけど。ぶつかつた時「邪魔」とか言つて足踏まれた！初対面なのに態度デカイ。あーゆう人嫌い！あ、でも顔は結構かっこ良かったかもしれないな。色白で、目が細くて唇はぼつてりしてて、髪が長い…いや、やっぱりあんまりかな。

平成9年5月6日

席替えしたらリュウタの隣。嫌な奴と思つてたけど、意外と笑つた時とか、かわいいの発見した。私のピンクのシャーペン気に入つたらしくて、買ってきてあげたら喜んでやがった。あと、給食のみそ

汁こぼした時「豆腐が一番飛んだ！」と叫んだ。あと自転車で電柱に突撃してた。アホだな。可愛い。そう言えばマコと、ヒナがリュウタの事好きとか言ってた。あいつ意外とモテルんだな。あいつ好きな人いるのかな？

平成9年6月20日

リュウタに国語の教科書借りたら筆記体の練習なんかしてて、ローマ字でびっしりタマちゃんの名前が…。リュウタの好きな人解っちゃった。最近誰かがリュウタはミクの事好きだなんて言ってたけど違うじゃん。何かがっかり(かも?)

平成9年7月18日

夏祭りにリュウタを誘ったけど、断られたからタマちゃんも呼んだし結局大人数。何か微妙だったけど、いたしかたない。リュウ達、他校の男子と喧嘩した。全然一緒におれん。

平成10年3月1日

最近リュウタとずっと話してない…。何かドキドキするしな。最近告白ブーム、クラス変わって誰かがリュウタとつき合ったらどうしよう死んじゃうな。

平成10年4月2日

リュウタとクラス離れた。どうでもよくなって「好き」って告白した。電話で。でも「つき合って」が言えなくて、私の事どう思ってる聞いたら、「嫌いじゃない。」だって。これじゃ解らない。つき合ってるって今度ちゃんと言おう。

平成10年5月29日

何とかリュウタにオッケーもらったけど、つき合ってる自信ない。誕生日も何も言ってくれないもん…と思ってただけ!!!一人で

帰ってたら自転車であって来て指輪くれたんだ　もう死んでもいい
とか思う

ここまで読んで、私は思わず吹き出してしまった。
何だ？この甘酸っぱい感じ。

彼との恋というよりも私の片想いの記録。

野球部の彼にわざとテニスボールを転がして投げ返してもらうとか、
観覧車のでっぺんでキスをしたりとか、修学旅行の夜、部屋まで来
てくれたけど、結局何もできなかったりとか、ささいな事が全部、
全部がドラマの様に胸に残ってる。

一年後も二年後も、彼を隣でみていたい…。幼い少女の初恋の記録
が今の自分の中に入ってくる。

世界がキラキラと輝いている。

あの頃の綺麗な想い出が心の中に溜まった灰色の空気を浄化してく
れるような気がした。

しかし、高校に入って学校が離れると、私の気持ちは次第に新しい
世界へと引き寄せられていく。リュウタとの距離が少しずつ離れて
いったのはその頃からだ。

平成11年4月20日

軽音楽部の見学で、ドラマのサヤと出会う。念願のバンド活動を始
める。楽しい。そう言えば最近のリュウタ嫌だ。高校入ってから、
エッチな事ばかりだ。きつと新しい友達とかの影響なんだろうな。
ただやりたいだけみたいに思えてくるよ…。それにバンドも男の子
いるけどどう思ってるかな？口では賛成してくれるけど、本当は嫌
だろうな。何かしんどいな。一人になれたらもっと気楽に好きな事
できるかな？

それから私はリュウタと別れる事になる。

その後彼から電話をくれた事もあったけど、（1人に慣れたらきつとすぐリュウタの事なんて

忘れられる。今は少し寂しいだけだ…）私は彼よりも、目の前にある新しい生活、夢、これから出会うであろう、沢山の人の出会いや恋に憧れていった。

大切な物は今、目の前にある幸せだって事に気付く事ができずに…。それから沢山の人と恋をした。

バンド活動も盛んだった。週2回の練習に、月1回のライブ活動。沢山の歌を歌ったけど、恋をする度に、相手をリュウタと比べ、歌の歌詞に浮かぶのはいつもリュウタとの恋の想い出だった。

子供だったと後悔したけど、その頃には彼はもうずっと遠い存在だった。

日記を閉じてミクはベットに横たわる。

（今、彼ともう一度繋がりを持てるチャンスが目の前まで来てるんだ。

後悔を重ね、臆病になっていた私だけど、このチャンスだけはやっぱり譲れない。絶対に。）

リュウタからのメールはまだ来ない…。

私は決心した。（もう一度賭けをする。）もし、今から送るメールがリュウタの彼女にみつかったらもうすっぱり諦める。もし見つからずに届いて、彼が返信してくれたら、もう一度彼に好かれる努力をしよう。

【元気？いきなりメールしてごめんね。久しぶりに話してみたくなっちゃった。】

たったコレだけのメールを送信するのに一体どれくらいの時間がかかっただろう？

でも、意外にもリュウタからの返信はすぐに私の元に届いた。

【久しぶりだな。大樹に話聞いて会ってみようかと思ってたんだけど、今足がないもんでお前ん家遠いしバイク買ったら行こうかな〜と思ってた(^^)】

普通に普通のメールで何か拍子抜けしたけど、このたった一通のメールが、今までの空白を埋めてくれた様な気がしたんだ。

【バイク!? 免許なんか取ったの? すごいじゃん! 絶対見たいんだけど 買ったらソッコロ見せてね!】

【おう! また電話するわ〜。】

この何気ないメールから、私の迷いは一気に吹き飛んだ。

(キタイしないなんて無理だ。絶対に彼の事あきらめない。)

私の心は決まった。

彼がバイクを買ったらとか、彼が彼女と別れたら…なんて待てるわけが無かった。

(今すぐ会って、彼との新しい関係を築くんだ。)

バイクなんていいもんじゃないが、私も当時原付きくらい持っていた。彼の家への行き方だって、まだすっかりと頭にインプットされてるし、いつでも迎えにいけるんだから…。

もう待っているだけじゃいられなかったんだ。

ルール。

初恋の彼が忘れられなくて、2年もかかってやっとメルアドをゲットした。

彼にはもう新しい恋人がいるし、絶対期待しない！！なんて言っただけ…。

駄目でした…私今めちゃめちゃ彼の事で頭がいっぱいなんです！！

…キンコンカンコーン

昼休みのチャイムが鳴った。

「ミク！起きてってばあ〜〜！！パンが売り切れる〜！！」甲高い菜穂の声が目が覚める。

もともと勉強なんてする気全く無いんだけど、さすがに午前中いっぱい寝てたのには自分でもどうかと思った…。

「やだやだ、ミクったら最近誰かさんの事で頭がいっぱいだもんね。ホントたるみすぎ！」

「まあね。もういいの！開き直ったんだから！！」

「そう来なくっちゃ！きゃはは！」菜穂がうれしそうに階段をかける。

まだ冬だって言うのに、思わずウトウトと眠たくなる暖かな日差しが射し込む午後。

たいくつな授業や、どうでもいい学校生活、稼いだってすぐに消えちゃうお金…。

胸の中にたくさん積もってた不満ややるせなさ、そういう物で景色なんて感じられなかったのに最近前はちょっとだけ違っている。

（恋ってすごい。でも怖い…。）

私の毎日は今、リュウター一色で出来ていた。

リュウタとの少ないメールのやり取りと、いつ来るか解らない電話とか誘いを待って、待って…。

何の連絡もない日が続くのは当たり前。それからリュウタとの間には忘れちゃいけないいくつかのルールだってある。

- 1、ミクからメールを送っちゃ駄目。
- 2、ミクから電話しちゃ駄目。
- 3、つき合ってって言っちゃ駄目。

勿論リュウタが言ったわけじゃない（さすがにそんなひどい男じゃないです。）私自身が心得ている

事で、このタブーをおかせば、リュウタが自分からまた離れていってしまう事くらいちゃんと解っているのだ。

それにその事をちゃんと守っていればいつかチャンスは訪れるとも思っていたし、待つのはちょっと寂しかったけど、メールが来た時のうれしさの方が何倍も勝っていたから…。

でも、彼からのメールはたわいもない物ばかりだったし、数もとっても少ない。

それでも、その少ないメールを全部保護して、読み返していれば、ちよっとだけ暖かい気持ちになれるのだった。

【今からスキーに行ってくるよ　でも、バスの中超暇だー！ミク何してるの？】

【何って学校に決まってるじゃん！そっちの学校いいね！スキーなんて行くんだ！こっちは退屈で朝からずっと寝てるだけ！】

【お前余計バカになるぞ。まあ俺を超える事はできないだろうけどな。帰ったらバイク買っただろ。今度見せてやる。】

【うん　楽しみだね　】

彼女と一緒になの？って打とうとしてやめた。ウザイだけだから。普通の友達っぽいメール。

お互いに昔の話とかは一切しなかったし、私も友達っぽく振舞った。そして何より彼自身“友達”としての一線を超えない様に心掛けていたのかもしれない。

所詮は男と女、元恋人同士。いつでも関係を持てる距離がそこにはあった。

彼がソレをしないのは、彼女に言い訳できるからだったのか、想い出をけがさない為なのか、はたまたただ何も考えてないだけなのか、解らないけど、少なくとも私は、一秒でも長く彼との関係が切れないう様にしたかった。友達でも何でも良かった。

最も中学時代はまだお互い携帯なんて持ってなかったから、メールのやり取りがあるだけでも、とても新鮮だったんだけどね。

そして、スキーに行った彼からは当然の様に2、3日連絡がなかった（彼女が同じ高校じゃ当たり前か。）

4日目の夜、彼から久しぶりの連絡が入る。

【ただいま〜 楽しかったよ^^明日から学校だけどテスト週間入るから午前中で終わりだよ！】

【こっちも学校午前中だよ。どうせ勉強しないけどね。】

【俺と一緒に！明日は孝介と浅田が来るよ〜お前んち近かったら誘ってやったけどね！電車ないもんない。】

ドキっとした…。

中学時代私とリュウウタは同じ学区だったけど、家が10キロ近く離れている上に、交通手段もほとんどなかったから、根性で自転車で家まで行った物だが、今それをやってしまうと、あまりにも会いたいって感じなので、私はまだ彼とちゃんと再会していない。（そん

な田舎が嫌で、お互いちょっと町の高校に通っているのだ。(
別に、私としては、自転車だつて容易い事だけど、引かれたくなく
て精一杯気持ち隠した。

【あたし暇で、暇で勉強なんか絶対する気ないから、一緒に遊んで
よ！言つてなかったけど、あたし原付き買ったからリュウタン家行
けるし】

送つてすぐやっぱりやめとけば良かったかなって思う私は小心者だ。
でもリュウタンはそんなの全然意識してないって感じてメールはすぐ
に返ってくる。

【マジ？じゃあ明日2時頃俺んちまで来てくれる？乗せてって!!】

(やった!!!)
胸が高鳴った。

【うん、じゃあ学校終わったら行くね。】

【待ってるわ〜。】

やっぱりその夜も眠れなかった。

約2年ぶりの彼との再会。

パックして、マッサージして、制服にアイロンかけて、一応下着選
んで(?)

(早く寝なきや！余計肌が荒れるよ!!)

久しぶりのときめきに、私の胸はもうパンク寸前だった。

そして、ついに私は彼と再会する事になる…。

見なれた景色、でもどこか懐かしいその景色は、彼の家に着くまでの15分間、一つも変わらず、家も、学校も、草も、木も、私とリュウタと一緒に通学してたあの頃のままだった。

原付きを飛ばしながら、私は考える。

（あの頃にタイムスリップして、リュウタとやり直したい。リュウタが私を好きだと言ってくれたあの日に帰りたい。）

もう一度あの頃に戻れる様な気がした。

暖かな午後はいけない夢を見せるのです。

彼の隣り。

原付きで15分、私は彼を見つけて思いきりブレーキをかける。

ズザ！！！！！！！！

砂利道の上で原付きが鈍い音を立てて止まった。

「リュウター！！」

ヘルメットを乱暴に投げ出すと、私は彼の元に駆け寄った。

「ミク！」

リュウタがにこにこしながら手を降っている。

映画や漫画の世界なら、こんな時、思わず抱きついちゃったりするのかな？

でも、現実世界ではそれはやつちや駄目。最大のタブーなのだ。

私も軽く手を降って、赤い顔を冷たい手のひらで冷やししながら彼の前でポーカーフェイスを装った。

「久しぶり、お前全然変わらないな。チビだな。」

リュウタが目を細めて笑う。彼も全然変わっていない。ちよつとうれい。

白くて綺麗な肌、少し長めに延ばした日に透ける細くて茶色の髪。

それをかきあげるしぐさや、ポテっとしたタラコみたいな唇、背の高い彼と話す時はちよつと首が痛かったな。それを上から見てるいじわるそうな細い目や、無駄におっきい手足を私に重ねる時の、子供の様な表情とか、記憶の中の彼と、目の前の彼が、重なりあって、色んな彼が、脳の中に一気に流れ込んでくる。

ドーパミン？とか 波？とか解んないけど、たぶんそういう物質が私の脳の中に大放されたような感じ。頭が真っ白になる。

彼の手も、唇にだって触れた事があるし、一度はそんな事さえ当た

り前になって、自分から別れてしまったくせに、改めて彼を目の前にしたら、あの頃の自分がとても妬ましくなって、後悔という二つの文字が、私の頭ん中いっぱいに広まっていくのが解った。もうこの髪に触れる事も、唇を重ねる事も二度と無いんだ。目の前にいる彼と、恋をして、2年もつき合ったなんて信じられない。

私は何でこの人を手放しちゃったの???

その瞬間、私は改めて彼に一目惚れしてしまったみたいだった。

「浅田と孝介来るまでここで座ってるか。ちょっと寒いけど。」
コンビニの駐車場には私達以外誰もいなかった。(平日の午後だったしね。)

リュウタはモコモコのジャケットに手を突っ込んで、駐車場の小さな縁石に座ると、隣をポンポンと叩いた。

隣に座ると、リュウタの柔らかい髪が私の耳に時々触れた。

「寒い。ってゆーかお前なんでそんな顔赤いの?」

「え?!」どきつとした。きつと今私の顔すごく赤いんだろうな。

こんな時なんて言えばいいのか解んないよ。

思わずリュウタの隣だからだよ。とか言ったらどう思つかない...なんて考えたけど、あまりにもひとりよがりだっけ解ってるから、ぐっと言葉を飲み込んでこらえた。

「急いで来たから熱くなっちゃっただけだよ!」笑顔の作り方が解んなくなっただけだ...

彼は煙草に火を付けて、フワフワ輪っかを作っては嬉しそうに私に見せる。

その頃の私はまだ少し煙草が苦手だったけど、彼の煙草の匂いは何だかちょっと心地よくて、私はあつたかい布団から出られない朝みたいな、夢の中でまどろんでいる様な、不思議な気持ちになっただけだ。

「吸う？」彼が私に煙草を差し出した。

「ううん、いい…。」

私は彼の煙草の煙につつまれながら、学校の事とか、バイトの事とか、たわいもない話をすつとずつとしていたと思った。もちろん彼の今カノの話題にはお互い触れなかったけど…。

しばらくすると、孝介と、浅田がやって来た。

「よお、お待たせ！ミクちゃんがいるなんて珍しいね。」

二人は一瞬驚いた顔をしてニヤニヤ顔を見合わせた。

（やっぱり今更うちらが二人でいるのって不自然なのかなあ…）少し悲しくなった。

私は、孝介とも浅田とも学校が違ったけど、高校に入ってすぐの頃、よく駅で見かけてて、その駅は色んな学校の子が集まってたから、何となく顔見知りで何度か一緒に話した事もあった。

二人はどうやら学校はやめてしまった様で、近頃見かけてなかったのだが、リュウタとはちよくちよく遊んでいたらしい。

もちろんリュウタの今カノとも、顔を合わせているだろう。

どっちかと言えば、人に説教する様な感じの人達ではなさそうだけど、おもしろがって彼女に言っちゃいそうな二人だ…。

リュウタはちよつと不機嫌そうに眉間にしわをよせて、二人に言った。

「何ニヤニヤしてんだよ！別にそーゆうんじゃないから！なあ？」

リュウタはめつたに怒らないけど、割と気分屋なところがある。今まさにちよつと気分悪い！って

感じだろう…。こんな時は笑顔で話を合わせる。

「うん。そーゆうんじゃないから。うちらなんてもうとつくに終わってんだし、たまたま暇で来ただけだよ。」

二人はとりあえずリュウタの機嫌が悪くなる厄介なので、

「ふーん。」と言ったキリ、特につっこんで来る事もなく、そのま

ま皆でたわいもない話をして、日が沈む頃、寒いし帰ろうという事になった。

「じゃあ、またな。」

リュウタが軽く手を振って、少し笑って帰って行った。

「うん、またね。暇な時メールちょうだい。」私も笑顔で返す。

でも解ってる。また今度はずっとずっと先で、もしかしたら“今度”なんてないかもしれない。

彼からのメールだって、彼がフッと暇な時に、彼女が忙しかったり、誰も遊ぶ人がいなかったら、たまたま私を思い出してなんとなくメールを打ってみるだけなんだろうな。

私はそんなメールを、また何日も待ち続けてしまっただろうな。

リュウタが帰ってしまつと、急に空が暗くなって、風がとても冷たかつた事に気づく…。

彼の隣は暖かい、冬でも日だまりの様に私を包み込んでしまつ不思議な空間だった。

何となく帰れなくて、立っていると、浅田が心配そうに私の顔を覗き込んで来た。

「お前、大丈夫か？ちゃんと帰れる？」

「何が？大丈夫だよ？」笑顔を作るけど、引きつってるんだろうな…。

「…リュウタの事好きなんだろ？でもあいつ彼女いるしやめといたら？」

「…。」泣きそうになる。うつむく私に浅田は念を押す様にポツリポツリと彼女の事を話し出した。

本当は聞きたくなかつた…。（何でそんな事言つもの？別に友達でいいって言ってるんだからいいじゃん。）

でもその頃の私は何だかんんだやっぱり甘かった…。
気付いてなかった…。彼女の存在の強さを…。自分の愚かさを…。

浅田はポツリポツリと言葉を並べた。

浅田の話によると、リュウタの今カノは、結構可愛くて、スタイルも良くて、すごく一途な女の子らしい。

でも、一つ問題なのは、結構束縛が激しいって事で、女の子のメモリーが入っているなんて知れたら大変な事になる様だ…。

だからリュウタの携帯には女の子の番号なんて入れられないはずだと言っ…。

「リュウタはきつとお前の事深く想ってくれないぜ…。どーゆうつもりか解らないけど、あの彼女にバレたらただじゃ済まないし、俺はあんまり関わらない方がいいと思うけど…。」

「うん…。」
私は聞いているようで、結構聞き流していたけど、あの頃は本当に皆に同じ事を言われていた。

好きな人がいるからって一緒になれないし、一緒になれたって幸せかなんて解らない。

未来がどんなに暗くても、あなたがいないよりはマシ。

どんな地獄の果てにだって、行こうと思えば行ける気がするんだから！

ただし一人で…なんて、あたしじゃなくても無理ですよ？

季節が変わる頃。

うとうと温かい日射し、どうやら春は近い様だ。

学校、バンド、バイト、恋…。

毎日がめまぐるしく過ぎて行く、季節もどんどん変わってく。

私は相変わらず、携帯片手につまらない授業中に内職（手紙書いたりとかね。）の真っ最中！

「何書いてんのー??」同じく暇そうなクラスメイトに声をかけられた。

「ん?コレ?交換日記ー」

「はあ?つけるね。」笑われた…。

最近ミクは交換日記にハマっている。相手は当時一緒にバンドを組んでたサヤと。

サヤとはお互い“バンド仲間”って感じでプライベートには干渉しない…みたいのが最初あつたし、のほほんと平凡に暮らしてる私と違って、さやは家庭の事とか、将来の事で色々大変で、あまりにも環境が違ったから、絶対解りあえないんじゃないかなんて勝手に思ってた…。

でも意外にも、彼女は私の歌詩を好きと言ってくれて、価値観もどことなく似ていたから、いつからかお互い足りないところを補える様な関係になっていた。

サヤが書いてくる物のほとんどは、日記と言うより彼女の“心の葛藤”とか、抽象的な物が多く、時々絵がついてたりもする。彼女の日記からインスピレーションを受けて、歌詞を作ったりもした。

彼女と私は頭いいクラスとちょっとバカなクラス（もちろんんミクが

…。)で、校舎も別だし、校内で出会う事はあんまりなかったけど、週に2回、バンドの練習の日には、決まって二人一緒にお茶する事になっていた。

練習はだいたいあと2人のメンバーの学校に合わせて午後7時からだったから、私達はマクナルドで、何時間でも色んな事を語り合ったり、歌をつくったりした。

その頃のミクにとって、バンドや歌を歌う事は、何物にも変えられない大切な物だった。

私とサヤと、当時大学院に通ってたトシくんと、ヨッペ。年齢も住んでる所もバラバラの四人。

それぞれ違う日常を送ってて、週に2回だけ、一つの音楽の元に集まる四人。

お互いの事はあんまり知らなかったけど、だからこそ、友達にはなかなか言えない事も平気で言えたり、何を聞いても軽蔑したり、嫌になる事もなかったし、お互いの事をよく知らなくても、好きな音楽と一緒に演奏する時は一体感を感じられたから、自分だけの居場所を感じられる様な気もしていた。

私はあの頃やっぱり寂しかった…。

リュウタとの消えてしまいうような関係や、学校の授業も何となくついていけなくて、今いる場所や将来とかに対して、毎日言い様のない不安にかられていたんだ…。

メンバーはいつもそれぞれ自分のポジションがどんな感じかって事ばかりだったから、あんまりミクの歌詞は注目されなかった(笑)それでも私は沢山歌詞を書いた。皆につっこまれない分、何でも言いたい事を大きな声で歌えたんだよね。

ある時いつもの様に、マックでお茶したらサヤがこんな事を言っ

た。

「わたしさあ、やっぱり家出てみようかなあ。何か今の状況嫌なんだよね。」

何とかなるって感じで笑うサヤってちよつとかっこいいなと思った瞬間である。

私はまだリュウタとの事で答えが見つからなかった。

これからどうなるのかは、ほとんど彼次第で、私の意志とは関係なく、運命に身をゆだねている状態だったし、依然友達のまま進展は難しかったし…。

それから2人がスタジオに向かうと、遅れてトシくとヨツペがやって来た。

「よお、ミクこないだ書いてきた詩なんか良かったよ」「トシくんが言った。

「えっ！いつつも歌詞なんか見ないじゃん！ちよつとうれいんだけど。」

「いくらなんでも自分らの歌の歌詞くらいタマには見るって！！」「トシくんに頭をこずかれた。

それから私達は約月一回のペースで、色んなイベントに出ては演奏をしていた。

もっぱら、無名のアマチュアバンドの演奏は、立ち止まる人だつて少なかったし、せわしない町の空気に掻き消されて、消えちやいそうなくらい自分の小ささを感じさせたりもしたけど、

気兼ねなく思ってる事を歌える時は何かちよつとすっきりしたものだ。

子猫の鈴の音、ちゃんとならない。あなたがキチンと首輪をしていてくれないせい。

あたしが逃げても関係ないフリ？がっかりさせずに楽しませてよ。

どうしたっていいの。悪い夢なら早く覚めて！！甘い夢の中でいつまでも溺れていたいの…目を閉じて、二人が一つでいられる夢の中へいきたいよ。

例え投げ出した足が雲からはみ出し地に足着かずに彷徨っても、未完成な翼で不器用に飛ぶのは、小さなこの胸ドキドキしたいから…。

歌を歌うみたいに、心に思っている事がもっと素直に言葉になれば良かった。

そしたらもっとリュウタに気持ちを伝える事ができたかもしれない…。

私はきつと心の中の半分もリュウタに伝えられなかった。あの子の好きよりも、もっと私の気持ちは勝っている自信あったのに…。

何年も待ったのに、どうして「好き」って言えないの？

彼女がいるから？彼女ってそんなにえらいの？

心に思う事はいっぱいあったけど、言葉にはできなかった。

自分勝手な言葉で、彼を傷つける事も、自分が傷つくのも、関係が切れてなくなるのも怖かったんだ…。

3月に入ると、私達の周りはまた少しづつ変わり始めていた。

大学院に通う二人はそろそろ就職活動をすると言い、サヤは秀才クラスから、普通クラスへ変更
届けを出した。

「だって、そんなに勉強したっていい大学受ける気ないから。」サヤはハッキリ言い切った。

私は…。

季節が変わる。皆がほとんど未来に向かって歩き出す時、私はまだリュウタとの初恋に淡い夢を抱いているだけで、これから先の事は何一つ考えなかった…。

「ミク、こないださあ、ライブのチケット余ってるって言ってたよな？良かったら俺行きたい！！一緒に行こうや！」

ある日、トシくんから電話があつて、私とトシくんは二人でライブを見に行く事になる。

何年も前からずっと好きで、私達のバンドでも曲を練習した某バンドの解散直前のライブだった。

何年も前、ほとんど売れてなかったはずなのに、そのバンドは気が付いたら大きなスタジアムで、解散ライブをやる様になって、思わず時間の流れを実感してしまう…。

憧れていた、いつも聞いていたバンドの解散が悲しいんじゃない。昔小さなライブハウスで見た小さなバンドがこんなに大きくなって、沢山の人からの声援を浴びるまでになる程時間は経つたつていうのに、私はあの頃のまんまで、恋さえ自分の物にできない。

今自分のやっているバンドでさえ、皆がそれぞれ歩き出せば、いつかは絶対になくなってしまふはず。そういう事が急に悲しく思えて来た。

（ああーやるせない。寂しい。居場所が見つからない！！）

涙が滝の様な次々と頬を流れていった。

「俺も泣けて来た〜！」トシくんもなんかちょっと泣いている。
単にライブ自体に…。）

大きなドームを彩る沢山のライトの花が花火みたいに生まれては消えて行く…。心を揺さぶる。

沢山のお客さんの声援を受けて、あの人達はどんなにいい気分なんだろう？

私はたつた一人の心をつかむ事さえできないし、この先どうなるかも解んないのに…。

何だか言い様のない虚無感に襲われた…。

私達のバンドが解散したのは、それからしばらくたった日の事だった。

理由はやっぱりそれぞれの進路や、環境の変化で忙しくなったからだ。

その頃、あるイベントの審査員として来ていたラジオのプロデューサーみたいな人が、アマチュアバンドを取り上げたラジオ番組に出ないかと誘ってくれたりもしたけど、すでに解散後の事だった…。

人生ってドラマや映画みたいにはいかないんだな…。

大切な物が一つ消えて行った。卒業とも呼べたかもしれない。でも、あたしの中では“消えてしまった”って感じだった。

それから自分の中にある大事な物が、消えてしまう事が怖いと感じる様になったんだ。

いくつも通り過ぎていった昨日という幸せ。そして、明日には過去になっていつか消えてしまう今日という日。

迷ってるうちに何かを手放したり、答えが見つからないまま取り残されるかもしれない、そんな毎日に不安を感じていた。

そしてその頃始めてリユウタに言っではいけない事を言ってしまう。

「ねえ、あたしの気持ち解ってるくせに、何でそんな態度でいられるの？彼女の事そんなに好きなの？だからはぐらかしてんの！」今までリュウタに対して彼女の事を問いつめたり、好きだと言わない様に気を付けてたのに…。

リュウタはそんな私にちよつとめんどくさそうに言ったんだ。

「うん、ごめん、そりゃ彼女が一番だから。」

金づちで頭を殴られた様な衝撃…。

リュウタは何だかんだ私の事はまんざらでもないのかと思つてた。なのに彼女の事を言われたとたん、私は突き放された。彼にとつては“その程度”の“友達”なんだ…。

それから…桜が咲いて、暖かくなる頃、

寂しくなると私はひとりぼっちで、桜の公園によく行く様になった。そこはいつでも暖かい空気や幸せそうな子供の声がしていた。何より、人に涙を見せて突き放されるのが怖かったあの頃は、一人になれる場所が必要だったし、落ち着いた。でも寂しかった…。

その時リュウタとは何とか縁が切れずに済んだけど、好きだったバンドと、自分のバンドの解散、リュウタとの事…、大事な物が通り過ぎようとするやるせなさを知った春の日、大事な物が離れて行く恐怖を感じたあの春以来、今でも私は桜を見ると無償に寂しい気持ちになる様になってしまった。

綺麗な花は短い命が終わると、バラバラになって皆どっかに飛んで行っちゃうものなんだよね。

女子高生の賭け

4月になって、クラスが変わると、もう皆一気に受験モードに突入していた。

とは言え、エスカレーター式に大学に上がれるうちの高校の場合、勉強に励む人と、やる気のない人がパツクリと奇麗に別れる。

ミクは簡単に入れる専門学校に決めていた。

なんとなく付属の大学に行っても、やっぱり勉強には着いて行けそうになかったし、昔から好きだった絵が描きたくてデザインの専門を選んだのだ。

だから全く勉強なんてする気がなかった。

そんなこんなで、成績別に別れる英語なんかのクラスもほとんど去年と同じ面子だった。

（そこにサヤがはいって来たのはウケたけど！）でも何となく、将来に向けて勉強を頑張る子が増えて、そういう雰囲気にはやっぱり馴染めなかった。

ますます学校がつまなくなっていくたのは言うまでもない。

その頃からまた、中学の時の友達が無償に恋しくなつて、3年間同じクラスだった“多香子”の家に居座る様になった。

多香子は優しいし、付き合いが長いから甘えられる。

リュウタや大樹とももちろん知り合いだから、いちいち最初から説明しなくても、事の流れをだいたい把握してくれるし、何だか楽で、私は多香子には色々と相談できた。

でもやっぱり答えは出ずに、リュウタとはずるずるお友達のままメールしたり、遊んだりしていた。

「ってゆうーかさあ、リュウタ彼女の事うざがってんならさっさと乗り換えればいいじゃんね。」

多香子がかつたるそーにリュウタん家を見上げる。

実は私達、ちよこちよこ訳もなくリュウタん家の近くでうろついているのだ。

(悪さないストーカーって感じ?)

「だよー、絶対あんな女より私のが性格いいっつもの!!」

「言えてる言えてる!本当ムカつくよね!」

…はあ。ため息が出てくる。半ストーカー的行動に加えて、会った事もない彼女の批判を試みたり…。その上、プリクラでチラッと見た限り、私なんかよりは結構かわいかったから本当のところ、見た目の事はあんまり否定できなかったんだけど…(死)

だけど近頃リュウタは彼女の愚痴を良くこぼす様になった。(まあ、どうでもよくなって、彼女の事聞いたりしたから、向こうも言える様になったのかも知れないけど…)リュウタの愚痴って言ったら、まあ毎回似た様な感じ。

「俺の彼女さあ、とにかく束縛激しいんだよ!メール返さなきゃ怒るし、電話なんかしょっちゅうかけてくるし、女のメモリーなんか見つかったらどんな事になるかわかったもんじゃないぜ!!」

今日はまた一段とイライラしている様子のリュウタ。私は複雑な心境で話を聞く。

「でもさあ、そんなところが可愛い!!とか思ってたんでしょ?女のメモリーないなんてあり得る?普通に不便じゃん!何だかんだ入れてるんでしょ?ならいいじゃん?」

「いや、本当じゃないよ。親戚の人くらいかな…」

リュウタがため息まじりに携帯を見る。

「じゃあさー、私にメールする時どうしてんの?」

「ん?そりゃ暗記でしょ、暗記!いちいちアドレス打つんだよ!!」

「え！そーなの！！大変な事してんだね！！」

と、言いながらそんなめんどくさい事までしてこのめんどくさがり屋が私にメールを打ってくれてるのかと思うとちょっと期待してしまったりする。（私バカ。）

「でもでもでもー！私もやっぱりアドレス入れてほしくい〜！！！！」

「お前アホかあ！そんな事したら殺されてしまうわ！」

リュウタの顔は本気だ。どうやらマジで結構彼女は強いらしい…。

「でも、まあ、確かにいちいち入力すんのめんどいしね、こうしよう！」

リュウタがカチカチ軽快な音を立てて携帯に何か打ち込んでいる。

「ほらね」

と画面を見せられると、そこには 店長 の文字が…。

そしてそこには私のメモリーがインプットされていた。

「う…これは名案なのかなあ…どうなの？大丈夫なわけ？」

リュウタはにっこり笑って

「大丈夫、大丈夫！あははは。」

とか得意そうに言っている。でも私は本当にこの笑顔にすんごく〜く弱かったから、

「解らないけど、いいんじゃない。あんたがいいんなら。」

もう呆れて物も言えなかった。

でもそんなところもちょっと、いや、かなり可愛いなあ〜とか思ってしまう自分だった…。

そんなこんなで私とリュウタの関係は全然進展していなかった…。

大樹も多香子もちょっとあきれた様子だった…。

私はその時やつぱり一番成績悪いクラスで、サヤや、見なれた面子と机を並べながら、窓の外をぼんやり眺めながら、自分の進路や、リュウタとの事を考えていた。

隣の教室からはカリカリとノートを取る音しか聞こえないって言うのに、このクラスはまるでお祭り騒ぎだ…。

「ミクーなんかしょぼいよ、みかん食べよう。」

「あのさあ、なぜ授業中にみかんが…。」

「いいなあーサヤにもちよーだい。」

おやつに化粧品に漫画…この教室はそーゆー物が飛び交っていた。でも、サヤは元々頭がいいし、菜穂や亜子達もちゃっかり上ランクのクラスだった。

その頃の私に取って、本当は何が一番ヤバかったかって言うと、実は…。

「留年!!!!!!」

「そう、留年、今度夏前のテストで60点は取らないとその時点で結構ヤバいから。」

先生からはしつかり念を押されていたんだ…。

最近の私はバンドに、バイトに、恋愛に…。

どれも大切で、一生懸命だったけど、実際は絵に書いた様な遊びっぷりで、これじゃ進路が決まっても、卒業できなくなっちゃう。

その頃の私はすごくイライラしていた。

やりたい事と、やらなきゃいけない事…。

あまりにも食い違っていた。

その中で、私はバンドはもう組めないなあと思った。

新しいバンドを立ち上げる事は大変な事だったし、精神的にも今は新しい仲間を作る余裕はないと思った…。

それから、ずっと続けて来たバイトも、とりあえず受験を言い訳にしばらく休む事にした…。

バイトの仲間は本当に家族みたいで心地良かったけど、今はそれも気が乗らなかった…。

大切な物は一つでいいと思った。

リュウタを取るしかない。リュウタしかいない…。

学校は何とか頑張つて卒業したい！

だから、やりたい事諦める。でもリュウタだけは譲れない！！

本来ミクは、男の為に、何かを犠牲にしたり、他の物を大切にできない女は好きじゃ無かった…。

男に依存して、裏切られたその後、何も残らないのも解っていたから…。

ましてやリュウタの気まぐれな誘いを待つ為に、私はずっと大切に
して来た事を手放そうとしてる…。

こんなんでいいのかなあ…って何度も自分に問いかけるけど、やっぱり私の意志は堅かった。

どんな事があつても今一番大切な物を必ず手にいれるんだ！！！！

リュウタのくしゃくしゃのあの笑顔を自分だけの物にしたかったんだ…。

それから私は来る日も来る日も補習とリュウタからの連絡を待つ日々だった。

リュウタはだいたい“彼女も友達も暇じゃない時”に私を呼んでるんだけど、

「バイトもやめたし暇になった。」と言うと、その誘いは少しずつ増えて行った。

【暇だ〜！！】って入って来て、

【じゃあ行っていい？】ってなぜかあたしが誘う形にさせるのは、狙ってるのかどうなのか、本当ズルイって思うけど、そんな短いメ

ールさえうれしくて、私は何日も待つてしまふのだった。最初は、浅田や孝介が一緒の事も多かったけど、だんだん2人で会う日も増えて行った…。

【今日うち来ていいよ。】

その日もまた短いメールで原付きを走らせてしまっミク。彼の家の近くの駅に原付きをおいて、なんとなく家族と顔を合わせない様に静かに二階に上がる。

リュウタの家は中学の時に出来たばかりのキレイな家で、木の香りや日射しの射し込む気持ちのいい家、階段には2匹のネコがいて、2階に上がってすぐの扉がリュウタの部屋…。

ずっと前から変わらない、家の中の空気、リュウタの部屋…。私がまだ彼女だった、あの頃のまま。

扉を空けると、リュウタはだいたいベットの上で煙草を吸っている。

「来たよ。」って声をかけると、

「よお。」って短い挨拶をして振り返る彼の笑顔は、大人びても見えるし、子供みたいにも見える。

細く日に透けた茶色の髪をなでられたらいいのにと思いながら、私もベットに座るんだ。

幼い頃、わけも解らずこのベットの上で、何度も唇を重ねた事、彼の白くて、細くて、筋肉質な腕に抱きしめられた事…今だって忘れられない。

でも今は、リュウタには彼女がいるし、私はただの友達で、その関係が壊れてしまったら、彼はきっと私を迷惑に思うし、こんな風に2人で会ったりしてくれない…。

だから私はいつもリュウタの体が触れない距離に座る。

リュウタも私を近くへ呼ぶ事はないし、どんなに2人でいても、キスをする事も、体を重ねる事もしなかった…。

皆はチャンスだ！って言うけど、私はそんな風に関係を終わらせてしまいたくなかった。

私なりに、この恋を大切に大切に守る手段だった。

時々リユウタは携帯が鳴っても出なくなつた。

彼女からだ…。

「あいつ、一回かけてくると長いから。」とか、

「別に好きかどうか解んない、喋ると喧嘩になるから出たくない。」

なんて言ってたけど、本当は私に気を使ってくれてるんじゃないかなんて、都合のいい期待もしたけど、

時々リユウタは、「3人でつき合うつてゆーのどーよ？仲良くなつたらあいつだつてそんなに怖いわけじゃないんだし」「なんて冗談を言つたりした。

「名案！なんて言うわけ無いじゃん！本当バカだね〜」

「やっぱ駄目？冗談冗談」「なんて、無神経なのか、本当にバカなのか…。

でもこんな冗談だつて、笑い合つて言える事に価値を感じていたんだ…。

とにかく今は待つて、我慢して、最後に笑えればいい。

全てが賭けだつた…。

そんな私を菜穂が呼び出したのは、5月の良く晴れた朝だつた…。

あなたの知らない世界

その日は太陽がまぶしくて、もう初夏の空気さえ感じられた。雨上がりの朝はとてもさわやか。

球技大会に向けて、校庭では生徒達がそれぞれ練習に励んでいる。ミクと菜穂は乾いたアスファルトを探して腰を下ろした。

いつも元気な菜穂が今日は少し憂鬱そうな表情を浮かべている。

「相談って何？この前からつき合ってる年下君の事でしょ？」

「うん…実は、私、司くんに隠し事されてたってゆうか…」

「隠し事？どんな？」

恋愛で悩んだ事なんてない。自分から振り回す事があっても、振り回される事なんてあんまりないって菜穂はいつも自信まんまんに笑って話してたのに、こんな日はめずらしい。

私は菜穂の彼、「司くん」が浮気でもしてるんじゃないか…なんて瞬時に想像してしまった。

しかし…。事はもっと…。

笑える事だった…。

「実は…」

「うん…」

思わずつばを飲む。

最近司くんが日曜日も遊んでくれない事とか、拳動不振で何かを隠しているっぽい事とか、色々。菜穂は話し始めた。しかもその理由が…。

「は？宗教？」

思わず聞き返してしまった。

「そう、何かおかしいと思ってたんだよ、だって日曜の朝は用事があるから平日の夜しか会えないとか、お泊まりしても必ず朝、晚トイレでこそそそ一人でなんか言っていたりするし、浮気じゃないかって問いつめたら、日曜日はお祈りに行くから…とか言いだして！もう、引くよね、大シヨツクー

！！」拳を握りしめる菜穂。

申し訳ないけれど、菜穂の自慢の年下彼氏がそんな事をやっているとはちよつと、いや、かなりうけた。菜穂の彼、“司くん”背も高し、顔も結構かつこよくて、何より今時のオシャレな男の子って感じ。パツと見年下には見えないし、菜穂が自慢するのも無理ないなって思ってたのに…。

「…ふつ、ふふ」菜穂の深刻そうな顔を見ると、さらに笑えてしまう。

「ひつどーい！！ミクなら相談乗ってくれと思ったのに…！！！」

「あはは、ごめん、ごめんね！あまりにも予想外だったからさあ、ちゃんと聞くから」

それから菜穂と私は、その 宗教 って物について約1時間程話し合う事になった…。

菜穂の話によれば、まず彼がその宗教に入ってしまったのは、どうやら変な先輩が原因で、初めはもちろん半信半疑だったけど、毎日とにかくお祈りを欠かさずやれば、近いうち必ず願いが叶うとか色々言われたり、そして何より特別な資金などもいらなくて事からおもしろ半分の手を出してしまったらしく、今ではどっぷりはまってしまった様だ。

お金もかけず、信じてさえいれば、例えば地震がきても絶対に助かるとか、逆にこのお祈りを知らない人やさぼってしまった人間は、不

幸になるとまで言っているらしい。

そして今ではすっかり信者の彼は、何とかして菜穂をそこへ連れて行こうとしているのだ。

「幸せになれる宗教だからこそ、菜穂と2人でやりたいんだ。」「…とまあ、こんな感じで言っているらしい…。」

「で、菜穂も行くの?」

「まさか!そんなキモイ所どーして私が行かなきゃいけないの!?!絶対嫌!?!」

「でも、本当に、お金もかかってないならそんなに問題ないし、2人で通えば日曜日も一緒に過ごせるよ!。」

「それはそうなんだけど…。」
「じゃあ、司くんと別れる?」

菜穂がぶんぶん首を横に振った。何だかんだ言いながら一度つき合うつちやんとまじめに相手の事を好きになるところがこの子のかわいいところだなーと思う。

「よし、それならやつぱり一度見ておいでよ。やめさせるにしたって、それが一体どんな物なのか見てみないとどうにもならないしね。」

「そっかあ…:そうだ!じゃあさーミクも一緒に行つてよ。」

「はあ?何でそうなる。」

「だって何かやつぱりちよつとキモイとか思うし1人で行く勇氣ないよ。無料で幸せになれるんならあんたも損ないでしょ!?!」

「そ、そーだけども…。」

「よし、決まり 司に伝えとくから日曜日空けといてよ^^」

菜穂の誘いについっし乗せられてしまった…。

でもその時の私は、とても弱つてて、本当に先が見えなかったから、今だったら笑っちゃうそんな宗教話にさえ、本当は少し期待してい

たのかもしれない。
得はしなくても損はしないし、色々お願いしてみようかな、なんて、
実は内心興味しんしんだった。

つて、事で早速次の日曜日、
宗教つて物を体験する事になった私は、駅ビルの前で、2人を待つ
ていた。

田舎から電車を乗り継いで1時間のこの町は、学校帰りには毎日の
様に、よく遊んでいたけど、休日は特に、ギターを引く人、踊る人、
何かを売る人に、もちろん乗り継ぎでホームを行き交う人なんかで
ごった返していた。

ミクは、休日のこの町が少し苦手だった。

田舎者だし、あんまりお金もなかったその頃の私は、洋服もそんな
に持ってなかつたし、ブランド品も化粧品も、そんなに買えなかつ
たから、ひとたび制服を脱いでしまうと、この町の中で、自分が一
番シヨボイ小さな存在に思えて、時々、暗い気持ちになってしまう
のだ…。

劣等感…それはリュウタの彼女に対して感じている気持ちにも似て
いると思った。

しばらく待っていると、2人がやって来た。

「ミクー、お待たせ 紹介するね、こちら彼氏の司くん。」

「初めまして、いつも菜穂がお世話になってます！」くったくの
ない笑顔で笑うかわいい男の子。プリクラなんかでいつも見てるけ
ど、こうしてまじかに見ると、オシャレでお似合いの2人

。会話にぎこちなさもなくて、自然な雰囲気がこの町の雰囲気
に溶け込んでいる。

(いいなあ、うらやましいな〜)

ミクはリュウタとつき合っていた遠い日の事を思い出していた。

私は始めから彼が自分とつき合ってくれるなんて思ってたし、つき合ってから、彼は、

スラツと背が高くって後輩からラブレターをもらったりしていたし、私はチビで、顔も普通程度だし、隣に立ってていいんだろうか？っていつも引け目を感じていたんだ。

今思うと、自分がどう見られてるか、って事ばかり考えてて、かんじんの彼との恋愛に没頭できなかった様な気もする…。本当に子供だった…。

(よし、今日はそんな自分とおさらばする為に祈るぞ！) 何だかちょっとやる気が湧いて来てしまった。

そして、「ちよつと、ミク、解ってるの？私達、司を止める為に来たんだからね！」なんて、耳元で菜穂に叱られたけど、その後、菜穂の心をも、ゆるがす人物が現れる事となる…。

私達3人は、にぎわう駅から薄暗い路地に入ると、いくつかのプレハブ倉庫が並ぶ、あやしい細道を抜けて、集会場(?)を目指した。怖さと好奇心でドキドキする。こんなわけの解らない体験はなかなか無いだろう。

「ここだよ。」司くんの指さす先には、いかにも怪しい小さなビルが建っていた…。

「じゃあ、男子部とはまた別だから、2人はここで待ってて。すぐにリーダーの人が来るから。」そう言うと司くんはさっさとどっかへ行ってしまった。

ミクと菜穂は会話もなく立ち尽くしていた…。

(どーしよ、やっぱりヤバいのかな？リーダーって何？どうせ頭ハゲた油臭いおっさんか、髪の毛ぼーぼーのデブのおばさんとか、とにかく怪しい人間にちがいないんだろうなあ…。)

隣で菜穂も険しい顔をしている。たぶん今、私達の考えは同じ、心は一つなのだ。

と、その時だ…。

「はあい あなた達ね、見学したいって言う司くんのお友達は？」
少しハスキーで甘ったるいかわいらしい声…。振り向くと、そこに立っていたのはブスでもデブでもない…。

「浜崎あゆみ…系…」

「そ、それだ！あゆだね、うん、間違いない…。」
女子部のリーダーは意外な事に、あゆ系の金髪美人だったんだ…。しかもその後出て来た男子部のイケ面ワイルドリーダーとは超お似合い夫婦で、かわいいう娘さんまでいたのだ！！！！

「うそ、信じられない…。」菜穂とミクは顔を見合わせた。

2人はここで、幸せを願う物同士出会い、恋をして、人生最大の幸せな結婚をしたと言う…。

その他にも、本当にお金がかからないって理由で、女子高生やら鼻ピアスのおにーちゃんやら意外な面子が勢ぞろいしていた…。

あっけにとられていた私達だったけど、

「浜崎あゆみじゃやるつきやないでしょ。」

「そうだよね…、別に損するわけじゃないしね…。」

そうしてミクと菜穂は成り行きで宗教の信者になってしまった。

でも、やっぱりミクに取っては、そんな事簡単に信じれるわけなくて、暇潰しってゆうか、昔女の子がよくやってたおまじないみたいな感じで、気が紛れればいいかあ、くらいにしか思っていないかった

んだけどね。

しかし、何かにすがっているうちは、何故だか“守られてる”様な気がする物で、お祈りを始めてからの私は何かちよっと落ち着いていたし、明るく頑張れた。

そして一見どーでもよかったその宗教のおかげなのかどうなのか（たぶん気のせい）リュウタとの仲がやっとな進展し始めたのは、偶然なのか、必然だったのか、本当にそのすぐ三日後の事だった…。

おやすみを言って。

最近のミクと菜穂の朝の会話は決まるところ、

「ねえ、お祈りしてる（笑）？何かいい事あった？」

ミクは答える。

「まあね。ぼちぼちな。」

実際、リュウタとの仲はやっぱりまだ“友達”だった…。

それでもおまじないの様に2人はそのおかしな宗教を何となく心の中で信じていた。

そしてまた、その日もリュウタからの短いメールで、ミクは彼の家へと走る。

「もしもし、リュウタ？着いたよ？」

「うん、上がって〜」

気怠そうな声、奴は決して玄関までお出迎えしてくれたりはいしない。ミクはもう慣れっこだった。

そんな彼の態度をいちいち気にしては身が持たないから。

いつもの様に2人は無意識に距離を取ってベッドに座る。

TVを見たり、漫画を読んだり、一人で居ても二人でいてもどっちでもいいような時間を一緒に過ごすのだ。

時々リュウタはシャワーを浴びたりご飯を食べたりする。

彼の生活、彼の日常を見ていると、ミクはいつそウドキドキサせられたけど、

彼にとっっては何でもない事で、乱雑に髪を拭きながら、どうでもいい事をまたずっと話すのだった。

少なくとも、ミクにとって、2人で行っているのはそんなに窮屈な事ではなかった。

元々、彼の勝手な行動やそれでいて実は結構優しい所なんかは好きだったから。

彼とは2年ぶりに再会したっていうのに、彼は基本的にあんまり変わっていない様な気がする。

違う学校に通って、知らない友達を作り、どんなバイトしてるのかも知らないし、色んな事が変わっているはずなのに、ミクは彼の“本質”を好きだと感じていたから、どんなに環境が変わっても、姿が変わっても、何度巡り会っても彼を好きになる様な気さえしていた。

ミクは自分の立場もちゃんとわきまえているつもりだった。

元力ノだからと大きい態度は取れない、あくまで自分だけの勝手な片思いだという事もちゃんと知っていた。

でも、最近どーしても気になる事が一点…。

ピロピロ〜

2人でTVを見ていると、聞き慣れた着メロが鳴る。リュウタのだ。「また鳴ってるよ？出れば？」

「いや、メールだから。」リュウタは携帯を枕の下に放り込む。

「俺、あんまりメールとかしない派だから。それよりお茶でも飲む？」そう言つとリュウタはさっさとキッチンに逃げて行ってしまった。

絶対、絶対決まって彼女のメールなのだ。

ちなみに私は、恋人の携帯をいちいちチェックする人が嫌い。

つき合ってるからってプライベートを干渉する人も嫌い。

細かい事を詮索するのもされるのも束縛も大っ嫌い！！！！

だからいちいち携帯を鳴らしまくるこの彼女の事がすごく気に入らなかった。

まあ、カンのいい彼女の事だから、元カノが家に居るとは思わなくても何かおかしいとは思っているのかもしれない…。

実際私は、そーゆう女が嫌いと言うよりも、リュウタの彼女がそんな感じだったから、ただ同じ様な女に見られなくなっただけなのかもしれないけど…。

リュウタの携帯がまた鳴る。
今度は着信だ。

リュウタの居ない部屋で、彼女の着メロがいつもより一層うるさく聞こえた。

(やっべー、超むかつく…。)
どっちかって言えば悪いのは私の方なんだけどね。

こんな時女なんて本当都合のいい生き物だな。なんて考えながらも、携帯が鳴りやむと、急に部屋が静かになって、自分の心臓の音が大きくなっている気がした。

何だかんだ言ってもミクのストレスはピークに達していたんだ。

耳障りな携帯の音がもう一回鳴ったら、ミクは絶対冷静ではいられない。

(携帯力チ割ってやりたい、駄目だ今日はもう帰ろうかな…。)
荷物を持って立ち上がった時だ、ベットの下に何か落ちているのが目に止まった。

手に取ると、それは、パンダのぬいぐるみだった。

(コレってもしかして…。) ミクの記憶の回路が繋がる。
そのパンダはミクにとってとても大切な物だった。

3年前のある日、リュウタとミクは動物園に出かけたんだ。
その動物園には小さな遊園地も付いてて、5分もあれば一周しちゃ

う様な観覧車なんかがあるんだけど、とても幼かった私は、その観覧車のでっぺんでチュウする！！って大騒ぎして（バカ）、もちろんリュウタはそのゆうのバカにするし、こっちも全然期待してなかったんだけど、実際にっぺんまで来た時、リュウタはチュウをしてくれた…。

私は大はしゃぎで、帰りにパンダのぬいぐるみまで買ってもらって、そんな恋人っぽい事してもらったってとても珍しかったから、私は本当に嬉しくって、その年のリュウタの誕生日に、時計と、同じパンダを買ってあげたんだっけ…。

ミクはそのパンダがまだリュウタの家にあるなんて想像もしてなかった。

少し薄汚れてしまったそのぬいぐるみは時の流れを感じさせて、ミクを悲しい気持ちにさせたけど、思えばこの部屋には、私のあげた物がいくつか紛れ込んでいる。

たぶんリュウタは別れたからっていちいちその彼女の物を、処分する様なタイプじゃないのだろう。

別に想い出に浸るとかそーゆーんじゃない、ただ忘れてるんだろう…私の中では大切にしまっている沢山の想い出も、リュウタにとっては何でもない事なんだろうな…。

ミクは荷物を下ろすと、ドアに耳を当てた。

静かな部屋の中がかすかに彼の足音と食器のぶつかる音が聞こえる。彼はまだキツチンだ。

私は本当は別に聞き分けがいいわけでも、いい子でも何でもないただの勝手な女でしかなかった。

本当は彼女の事も、わけの解らない“友達”って関係にもほとほと疲れきっていた。

リュウタの携帯に手を伸ばす。

彼の携帯は無防備にもロックもかけられていない。私の知らない彼の日常を本当は知りたくて仕方なかった。私はその束縛のひどい彼女と何も変わらない。

メールフォルダの中は本当に彼女のメール以外何もなかった。他の女のメールも私のメールさえも…。

(彼女、“千理”って言うんだ…。)

私は震える手で、千理のメールを開いた。でもそこには意外な事が書かれていたんだ…。

(はあ？なんじゃこりゃ??これじゃまるで…。)
そこに書かれていたのはこんな感じ…。

【リュウタくん、どーして電話もメールも返してくれないの? 一体なんな訳? 何してんの? 最近おやすみのメールもくれないよね? おやすみだけは毎日言ってるっていったじゃん!!!】

私は何だかちよつとホツとしていた。

だって何かコレじゃまるで、2人がうまくいってないみたいじゃない。

(つてゆーか、毎日「おやすみ」なんて、そんなめんどくさい事奴がしているのか…。)

何かやつぱり彼も変わったのかな? 私がつき合ってる頃ってお互い携帯なかったからなあ…)

ちよつと嬉しくてニヤついてると、彼がキッチンから戻って来た。

「何お前一人でニヤニヤしてんの? キモイよ」

「別に? それよりコレまた鳴りましたけど?」

ストラップをつまんでいる私を見て、一瞬リュウタの顔がマジにな

る。

「うわっ、お前いつの間に!!返せって!」

「やーだね!」携帯を開くとリュウタが慌てて飛びついて来た。

「よせって、離せって!」

携帯を握る私の手の上に大きなリュウタの手が重なる…。

ベットの上でリュウタがのしかかっけてきて、ミクは一人で勝手にドキドキしていた。

「お前って奴は油断も隙もねーんだから!!」

携帯が手の中に戻ると、リュウタは安心したって顔で、また私と距離を取って座る。

リュウタの体が離れるとミクはちょっとがっかりした。

(あーあ、やっちゃったっていいのに…)。

何かちょっと自分ってずるいし最低だなど思ったけど、でも何かどうでもいいって感じだった。

「ねえ、コレさあ覚えてる?」ミクは今度はパンダをつまんだ。

「あー昔お前が置いてったやつだろ?まだあったんだ。欲しいなら持ってっていいけど?」

「いいの、ココに置いてきたいの。」

リュウタはふーん、と答えた。

こいつは私や彼女の気持ちがどこまで理解できるんだろう?

最も私はリュウタの気持ちなんて全然解んないし、彼女の気持ちなんて知りたくもないけど…。

「そろそろ帰ろうかなあ。」

「あ、じゃあ俺も途中まで乗せてって。」

「いいよ。」

2人は原付きで外に出た。

夜だって言うのに蒸し暑くて、2人乗りしていると、少し汗ばんだりユウタの体温で自分も熱くなる。でもそれが良かった。

私は原付きで走ってる間も少しでも話がしたくて大きな声でしゃべっていた。

「私ー、こーやって2人乗りしながら昔誰かと喧嘩したー!!!」
リュウタも大きな声で答える。

「ばか、それ俺だわー！お前が乙女チックに横座りで自転車乗ったからやめろって言ったんだよ！」

「そーだっけ??」

私は彼が覚えててくれて嬉しいと思った。

「じゃあ、私の名前フルネームで言える？漢字で書ける？誕生日言える？家どこか解る??」

「お前俺をなめてんのかよ、そこまで記憶力悪くないし!!!」

ミクは大声で笑った。

「何がおかしいよ?」

「別に、気にしないで!」

ミクは嬉しかった。些細な事も全部忘れられてる気がしてたから。

(やべえ、もう引き返せない。)

ミクはリュウタの事がどんどん好きになっていた。

そしてその日の夜、リュウタからまた短いメールが届いたんだ。

【おやすみ。】って…。

驚いた…意味は解らないけど、嬉しかった。

ミクも短いメールを返した。

【大好きだよ。おやすみ。】

言うてはいけないと思っていた。でも入れたかった。

それから次の日もその次の日も彼からの【おやすみ】は届いたのだ
った…。

SAVE ME

その日私は多香子の家に居た。

その日：と言うか、最近よく多香子の家に来ていた。

「見て！！コレ！」

ミクは自分の携帯を多香子に見せた。

リュウタからの【おやすみ】は昨日も入って来た。

「すごいじゃん！あいつがこんな物入れてくるなんて笑える！でもすごいじゃん！」

多香子はリュウタの事知ってるから、良かったねって言うてくれる。

ミクはそれがとても嬉しかった。

最も他の友達に見せたら、なんて言うだろう？

彼女がいるのにこんな物入れてくる奴をバカだと思うだろうか…。

それとも私の事を可愛そうに思うだろうか…。ミクは自信がなかった。

それからその【おやすみ】は日に日に変わって来ていた。

字に色が付いていたり、点滅したり、絵文字が付いたり、リュウタの遊びの一つ一つに期待は高鳴っていった。

昨日のはついに語尾にハートマークが付いていた。

何がしたいのかはさっぱり謎だったけど、そーゆう変化の一つ一つにミクは振り回されていたんだ。

「やっぱり、お祈りしたかいがあったー」

「まだそんな事言ってるの？バカだなあ。あんた頑張って来たじゃない。」

多香子は優しいなあ…でもやっぱりミクはお祈りのせいだと思ってる事にしてた。

何かのおかげだっと思っるのは気持ちが楽だった。

それを続けてさえいれば、リュウタとの関係も切れない様な気がするから。

実際はそんな単純な事じゃないんだらうけど…。

その頃からミクは聞く音楽の趣味も変わって来ていた。

恋愛とは不思議な物で、自分の趣味や物の好みまで左右してしまうのだ。

ミクは昔から元気でノリのいい歌が好きで、バンド時代もずっと、ジューデイマリやヒスブルの歌を歌ったり、自分で作る歌もそれに近かった。

その頃の女子高生って言ったら、皆やつぱりあゆとか聞いてて、

「あゆの歌って歌詞がいいよねー」なんて話してたけど、ミクにはよくわかんなかった。

切ないとか、解らない程子供だったんだ。

「最近さあ、あゆとか、愛内里菜とか、古いけど、華原朋美とか聞くよー。」

「あんたが？どーしたの？」多香子が笑って言った。

自分にも解んないけど、その頃から、今までよく解んないと思っていた歌の歌詞とかに共感を覚える様になったんだ。

何か女の子が心の中でぎりぎりの所に居る様な歌に気持ちが重なっていた。

当時、私が好きだった歌は皆、どこことなく辛くてもちゃんと戦おうとしてる女の子の歌ばかりだ。

たぶんそーゆう風になりたい、ならなきゃいけないと思っていた。

【誰にも言えない、誰かに言いたい、あの人が誰より大切って。】

【あの人じゃなければ、駄目だと言い切れる。それは君だと気付く

時、昔どんな悲しい別れをした人も、忘れるものだど気付いたよ、後にはもう引けない… for your love この手がもし君から離れてしまったなら、解らない何処に行けばいいのかさえ、何一つとも、これ以上この世界に守りたい物なんてないのに。明日は私の中に優しさ強さ、ありたい save me】

【一晩が終わるやるせなさど、そして一日が始まる不安との挟間で、一瞬よぎる優しさに、君と感じ合いたいと甘い夢を見てしまう。】

【あなたのイニシャル、砂場に書いて、また消して、時間のネジ回して、次の約束がノートに書いてあるから、それを見て、それを抱いて今日はいい夢見よう…。】とか…。

柄にもなくそーゆうのばかりギャルとかに借りて聞きあさってしまふ自分。

あー恋愛、いや、恋とか片思いとか、昔の彼とか…問題があつて、ハードルが高い程、私はそのアリ地獄の様な呪縛の中に吸い込まれて行ってしまふ。

こんなに誰かを好きだと思ひ込んで、こんなにコントロールが効かなくなる事が私の一生の中にこれから先あるんだろうか？

彼の気持ちも解らないままこんなに彼の事を好きになつていいんだろうか？

だいたいもう既に一度終わった2人がもう一度なんてあるんだろうか？

ミクの頭の中はリュウタの事でいっぱいだった。

次のテストを落とすと留年する…。

でも勉強の事とか嫌な事は全部忘れていたかつた。

結局ね、若かつたんだ…あの頃。

ミクは今でも思うのです。

とにかく若かった。頑張れば何でも手に入ると思ってたし、何でもかんでも根性で何とかしようと思っていたし、

辛いけど、若いっていいなって思うミクなのでした…。

（まだまだ次回へ続きます。）

告白。

ゆっくりと、確実にミクとリュウタの関係は変わって来ていた。

季節はもう、暑さも本番にさしかかる7月の初旬の事…。

私は留年するかもしれない程勉強してなかった。する気もない。リュウタからの短い「おやすみ」と、少ない誘いだけが、心の支えそのものだ。

ある日、担任の小森先生から呼び出される…。

小森はとても熱血な教師だ。

リュウタの話をした事…ミクは後悔した…。

「ミク、お前本当にやる気ないなあ…次のテスト頼むよ。絶対60点以上取ってね。」

小森は頭を抱えてミクを困った顔で見る…。

「解ってますよ、ちゃんと卒業するから今は放つといて下さいよー。」

いつもの様に聞き流す。

「お前さあ、もしかしてまだあの元彼と関わってんのか？やめた方がいいいぞー。恋なんてさあ、一瞬の事じゃん？お前も解ってたんだろ？どうしてそう見返りのない恋に走るのかなあー。」

いつもの説教が始まった…。

去年までの小森はこんな事言う人じゃなかったのにな。

先生も応援してる！なんてはしゃいでたくせに、担任ともなると、

その子の進路や態度が自分への評価へと繋がるから…。
大人も大変らしい。

「先生には解んないよ…。今私達の目の前にある大切な物が何かなんて…。」

私はそれだけ言うつとさっさと荷物をまとめて教室を出る。
だって今日もリュウタと遊ぶ約束をしてるんだもん…。

その頃の私にはそれが全てだった。

数少ないリュウタからの誘いを断るのは絶対、絶対できなかった…。

でも最近のリュウタの態度、今までの“友達だから”ってゆうのはまた少し違う気もするんだ。

だって、めんどくさがりのリュウタが興味ない女の子に毎日メールを入れたりするわけないもん。

少しづつだけど、リュウタも私を意識し始めている気がする…。

とにかく今は誰にも邪魔されたくない、口出してほしくなかった。

外を見ると、小雨がパラついていた。

でもリュウタと会える…私は気にせず駅に向かった。

駅に着くと、友達の傘に入れてもらいながら、私を待つリュウタが見えた。

私が声をかけると、小走りに近付いてくる。

「今日俺が運転手してやるよ！」

無邪気に笑う彼が今日も愛しい。

「やだ！あんた絶対運転荒いもん！怖い！」

そんな事を言いながら、いつもの様に平然を装うんだ。

「バーカ。俺中免取ってんだぞ？お前より上だろーが、ほらどけ！お前は後ろだ！」

私は無理矢理後ろに乗せられて、あーでもないこーでもないってしばらくもめたりして…。

本当はね、こんな時間がめちゃくちゃ好きだったりする。

そんなやり取りを見ていたリュウタの友達に「それ、彼女？」なんて聞かれると、

「違うよ。」って2人揃って返事をするけど、何となくにやけてしまっ自分隠すんだ。

夏とは言え、パラパラと小雨が体に当たるととても寒い日だった。

リュウタの運転はやっぱり荒くて乗り心地は最悪。

それでもリュウタの背中は大きくて、暖かいから、その日も私のドキドキは止まらなかった。

こんな時決まって考えるのは一つ。
もう死んでもいいかな…なんて。

家に着くと、さっそくりュウタはお目当てのパソコンで作業を始めた。

たいくつそうに覗き込んでいると、

「もうちょっと！」なんて甘えて言ってくる。

私はこの笑顔にもわがままなところにもすっごくすっごく弱かった。

（かわいいなあ…）

「ねえ、今日この後用事あるの？ないならゆっくりしてってよ。どーせ誰もいないから。」

「うん、別に用ないし俺も暇だからいいよ。」
それからリュウタの用が済むと私の部屋で、またたわいもない話をした。

最近の学校の事とかどーでもいいＴＶの話とか、
いつもの様に、お互いに無意識に距離を取って…。
でも私はそんな時間さえも幸せだと思っていた。

完全に彼に依存し始めていた。

もっと近くに、せめて手が触れられるくらい近くに行きたい…。
ミクの欲求はどんどん膨らんでいた。

これ以上気持ちの口に出さずにいられなかったんだ…。

「ねえ、彼女とはどうなってるの？何かいつも電話とか出ないけど
うまくいってないの？」

リュウタの顔が少しこわばった…。
雨で薄暗いせいかな…部屋の空気が一瞬で凍り付いた気がした。
リュウタは言葉を選ぶ様にぼそぼそと答える。

「別に…。付き合い長いと近くにいるのが当たり前って感じになる
じゃん？嫌いってわけじゃないけど、恋愛感情があるのかって聞か
れたらちよつと解んなくなってるって気もするけど…。どーだろう。」

「そっか…。」

予想度通りのあいまいな答え、リュウタは気持ちを隠すのが上手か
った。

あんなに詮索しないって決めていたのに、やっぱり人間なんてわがままで、我慢や思いやりなんて所詮綺麗ごとのままごとだ。私もそんな女の一人…リュウタの気持ち欲しかった、愛されたかった。

「でも彼女と別れようとかは思わないんでしょう？」

「…。」

リュウタの視線が私をすり抜けた。

やっぱりまだ聞いてはいけない事なのかな…。

雨の音がいつそう強くなる。

それでも私の心臓の音は一層大きくなっているに違いない。

リュウタが好きなんだよ。

解って…。

「あんだ、あたしが彼女の事全然気にしてないとも思ったのー？好きなんだから気になっちゃうに決まってんじゃない！でも別に責めたんじゃないよ？聞いたただだよー！怒らないでよー！！」

聞会話の流れが何だか変になる。

彼の顔がまっすぐ見れなくなってきた…。

リュウタは少し驚いた様な顔で

「マジで…？」とつぶやく。

その表情は少し照れた様にも取れるし、困った様にも見えた。

彼の心がどんどん知りたくなる。
やっぱり自分が想う様に想われたい。
もうひとりぼっちは嫌だったんだ…。

「あたしが好きって言ってるの冗談だとも思ってたわけ？」
冗談っぽく聞いてみた。

リュウタは私の悲しそうな顔を覗き込んで、機嫌をとる様に言った。

「まさか…そんな事ねーよ。」

リュウタもぎこちない笑顔を浮かべる。
でもどことなく私の顔を伺ってるみたいだった。

雨の音が一層強くなる。

リュウタの表情がまじめに見える。
もちろん私はそれを見逃さない。

いつになく真剣な表情の彼。

私もつられてマジになる…。

さっきまでおちゃらけていた2人。

ベットの上で、少しだけリュウタに近付くと、

2人の視線がぶつかった…。

好き…。

ドキドキして、熱くなった…。

彼から視線がそらせなくなった。

リュウタもきつと気付いている。

私はもう彼の事しか考えられなくなっていた。

早く気が付いて…。

リュウタは頭を抱えながらはぐらかすみたいに笑って言った。

「こつ見えても俺だってねー、結構悩んだりしてるんだからー。」

そう言っつて目をそらすと、一瞬困った様な顔をする。でもおちやうけた感じじゃない。

「ミク…。」

リュウタが小さくつぶやく様に名前を呼んだ。

リュウタの口元がゆっくり動く…。

“彼女が好きだ”とか“ごめん”なんて言葉だったらどうすればいい？

私は必死に笑顔を作る。

泣き出しそうだった。

「ちょっと困った？そんなマジな顔しないでよ、冗談だよ！リュウタが彼女好きだって事もちゃんとしてるし、リュウタが私を好きじゃなくてもいいの、ちゃんと解ってるんだから！」

めいっばいおどけて見せる。

だって困らせたいわけじゃないんだもん…。

ただ、彼を好きだけなんだ。

別に彼と彼女をめちゃくちゃにしたいわけでもないんだよ。

本当に本当に、ただ、一秒でも長く一緒にいて、一ミリでも距離を縮めたいだけ。

でも、時々ミクはこんな自分をはがゆく思う。

奇麗事ばかり並べてる。

2人を壊すのは悪い事、でも自分も好かれないなんて、自分でもあきれ程、偽善者でずるい生き物だ。

自己嫌悪を感じる…。

でもそんな風にしか彼を好きでいられなかった。

彼には彼女がいる。

じゃあ、私は何だろう？

彼の口からどんな言葉が出るか予想もできなかった。

急に怖くなる。

彼の口から改めて“友達”とは聞きたくないと思った。

ミクはベットから立ち上がろうとした。

…と、その時…。

グイっ！！！！

「うあー！！！！」

強い力でベツトに戻される。

リュウタの大きな手が、私の腕をしっかりと掴んだ。

…何？

私は思った。

リュウタの中の答えなのかな？

縁を切りたい？

それとも、このまま良き友達で？

リュウタは彼女と別れる気ないし、私を好きはずじゃない。

ミクは心の奥で小さな決心をした。

友達って言われたらもう少し頑張ろう…。縁を切るって言っなら
ちゃんと…アキラメナクチャ。

リュウタがミクに少し近付いて、2人の視線が重ると、
治まった熱が、また体中に広がってきて緊張した…。

ミクの心臓はドキドキして、爆発寸前だ。

腕を掴まれただけでも興奮する。

もう冷静でいられない。

いつもより少ししめじめなリュウタの顔がそこにある。

いつも距離を取っていたリュウタの腕が、ミクの腕をしっかりと掴んでいる。

お願い…縁を切るなんて言わないで。

緊張が走る。

リュウタが小さな声でつぶやいた。

「…そんな事ねえよ、好きだし。」

「え…。」

一瞬の事だった…。

「嘘だ…。」

「嘘じゃないよ。」

信じられなかった。
頭が真っ白になる。

モウシンデモイイ…。
またそう
思った。

私は思った。

この恋が終わってしまっても、いつか他の誰かと恋をしても、おば
ーちゃんになったって、
今日の事一生忘れないだろうなって。

メール

突然の事。

…でも私は嬉しかった。

だつてずっとその一言が聞きたかつたんだもん。

リュウタはその日ミクを好きだと言ってくれた…。

彼の単なる気まぐれかもしれないし、

私の中の好きって気持ちとはもつと違う意味だろうけど…。

だつて“人は1000人1000通り…”

だからたつた一言の「好き」って気持ちを皆が皆同じ意味で使ってるわけじゃない。

夜も眠れないくらいリュウタの事を考えてるミクとは違う。

うまく言えないけど、リュウタの言ってくれた好きって気持ちは、一緒に居て楽しいとか、好きって言ってくれたからとか、

つまりまだ、ミクを気に入ってるって程度なんだってちゃんと解っていた。

それでも、照れ笑いを浮かべる彼の態度は、やっぱり今までとは違うから、

私は満たされた気持ちでいっぱいになれたんだ。

「ねえ、雨ひどくなるといけないから、もう帰るよ。送って。」
リュウタはさっさと帰る用意を始めた。

なんだかごまかされた感じだつたけど、たぶん彼なりの照れ隠しだつた。

「うん。解った。」

ミクもベットから立ち上がった。

もっと一緒にいたい…。

そんな気持ちでいっぱいだった。

でも、この後また彼女の話聞くのは嫌だと思った。

今はただ、余韻に浸っていたから、私もすぐにリュウタを送る事にした。

雨はひどい音を立て、激しさを増していた。

リュウタはミクにくつついて、

「超寒い〜！死んじゃうって！」とか叫んでた。

こんな風に2人の距離をくつつけてくれる雨ならいくらだって平気だった。

家に帰った頃、びしょぬれの体を暖めていると、リュウタからのメールが届いた。

【雨、大丈夫だった？ごめんな。】

彼の優しい言葉にまたドキっとした。

どうして彼はこんなに私の心を知っているんだろう…。

彼の行動や、言葉は全部ミクの心を持って行った…。

好きって気持ちがあんまり増加していくのが解る。

リュウタはずるい。

いじわるな言葉や優しい言葉で、私を振り回して、
焼きもちを焼かせて、いつもミクの頭の中を占拠する。
じれったい態度は、ますますミクを夢中にさせたし、
何よりそれを天然でやっちゃん彼の事を私は憎めなかった…。

もつと私を好きになって…。

あいまいな気持ちじゃなくて、
ちゃんと私を見て…。

彼女と重ねないで…私だけを好きになってほしい。

悔しいけど、私はしばらく“待つ”事にした。

リュウタがいつか彼女と別れて、
私と同じ気持ちで、「好き」って言ってくれる日を…。

もう後には戻れないって確信した。

その日も【おやすみ】のメールは来たし、
数日後も普通に2人で遊んだ。

変わらない態度、

いつもの何でもない会話と時間。

何も変わらない2人の関係。

でも、私は期待していた。

そのうち彼女の事が頭からどんどん消えて行った。
もう考えたくなかったんだ。

側で見てるわけじゃないから、2人の絆の深さを想像仕切れなかった。
いや、考えるとどんどん悪い風にしか考えれなくなるから、彼女の事、もう知りたくなかったし、忘れたかったんだ…。

現実逃避に都合のいい期待感。

周りが見えなくなって一人よがりになる。

忘れちゃいけない事沢山あったはずなのに、

夢中になるにつれて、ミクは大事な事をどんどん忘れていった。

そして私はある日最大のミスをおかした。

最初で最後…。

ミクからリュウタへの初めてのメールだった。

【今何してんの？】

そう…たったこれだけ。

その日リュウタは「今日は学校ないし彼女とも会わないから家でのんびり過ごす。」なんて

言ってた。

私は放課後ちょうど予定がなくなって暇だった。

すかさずリュウタを思い出してメールしちゃったんだ。

でも戻って来たメールを見て血の気が引いた…。

だって…。

【誰ですか？】

それを見て、私は急に我に返った。

(コレ、リュウタじゃない…。)

そう、それは最も恐れていた存在…。
彼女の千理ちゃんに間違いない。

【間違えました。】

それからメールは来なかった。

リュウタに夜電話で聞くと、

「そんなの聞いてないし、お前からの受信も送信も履歴ないよ?!」
…と驚いていた。

黙り込む私に対して彼は結構ノー天気な構えで言った。

「あいつは怪しいと思ったら問いつめるはずだから、本当に間違いか迷惑メールだと思って消したんだろ？勝手に見たのバレナイ為に消しただけだよ。大丈夫だって!」

リュウタはあんまり気にしていなかった。

「そうかなあ…。」

「たぶんそうだよ。気にすんなって。良くあるんだって勝手に携帯見るからね〜あいつ。」

「勝手にメールしてごめん。」

「いいよ…もう。」

私はリュウタに怒られなかった事でホッとした。

でも、何だかりュウタが彼女の事を何でも知ってるって口調だったから悲しくなった。

今更だし当たり前だけど…。

でも本当はリュウタもミクもまだ彼女の事良く解ってなかったのかもしれない。

「好き」は1000人1000通り。

私がリュウタの気持ち解らなくて、リュウタが私の気持ちを理解できないように、

私達も彼女の事、良く解ってなかったんだ。

その後、忘れた頃にそのメールが大変な事を引き起こす。

ミクもリュウタも、まだそれに気づかずにいた。

心に広がる魔物

遂に事件は起こった…。

ミクの頭は後悔でいっぱいだった。

よくある話、後の祭りってやつ。

あの時あんな態度取らなきゃ、あんな事いわなきゃ、

あんな物見なければ…！！！！

そう、それは忘れもしない7月のある暑い日の事。

学校では菜穂がまた騒いでいた。

「あの宗教ぜってーインチキ！！！！」

いつになく取り乱す菜穂。

それをなだめる亜子達…。

聞けば、司くんが宗教にハマり過ぎてトラブルを起こしたらしい…。

優しくかった幹部の人達もすっかり態度が変わって、

今となつては夕子の悪い取り立て屋の様な物だった。

「もーあの人達の事は忘れなさい！幸せはそんなんじゃない手に入らないんだから。」

亜子の意見はもつともだった。

何かにすがってないとやってられない私達…。

別にマジだったわけじゃない。

ただ、なんとなく頑張れない時、勇気をくれる魔法の様なおまじなの呪文だった。

あーあ、やっぱり世の中ってうまくいかない。

菜穂も私も少し凹んだ。

根拠のない“大丈夫”って気持ちはもうすっかりなくなっていた。最近の補習ばかりだし、暑いし、何かかったるい時期だった。

その夜リュウタからの久しぶりの電話が来る。

でも内容を聞いてまた凹む。

「明日、彼女がうちに来るって聞かないんだ。この前のメールの件もあるし、気つけてな。」

…。

（はいはい、解ったよ。）

わかつちやいるけど、ちょっと寂しい気分になる。

所詮、私はリュウタにとっての友達でしかないって思い知らされる。変だよ、2人は恋人同士なんだから、家に来たってどこで一緒に居たって普通なのに、

ちゃんと解ってるのに、
なんだろう？

リュウタの口からあらためて言われると急に彼女の事が リアルに気になった。

（彼女とリュウタ、どんな時間を過ごすのかな？）

こんな時の想像は良くない事ばかりが浮かぶ。

友達と彼女の違い、リュウタもきつとちゃんとわけてる。

友達の私とはタマにメールしたり、何でもない時間を過ごす。

彼女とはきつと…。

次の日私は何となく落ち着かなくて、やっぱりうわの空だった。あの部屋にはベットとTVしかないし、やっぱり今頃2人はキスしたり抱き合ってたしてるのかな？

私の触れられない彼の体に、千理は簡単に触れて、自分の物だと確認するんだろうな。

気になって仕方がなかった。

久しぶりに大樹に電話して、何となくもやもやを打ち明ける。

「確かに、気になるけど、当たり前前の事じゃん。今更気にするなよ。」

「

大樹にさらりと言われた。

「うん。」

それから何となく冴えない私を大樹が励ましてくれた。

「でも、リュウタはミクとつき合いたいって言ってたよ。期待しない方がいいとは思うけど、いい方向向かってんじゃないの？」

「それ、リュウタが言ったの？」

「うん、だから頑張れ。」

少し励まされた。

もちろんそんなの期待しちゃ駄目って解ってる。

でも彼を待つしかないし、こんな事はこれから沢山慣れて行かなきゃって思った。

でもやっぱりその夜はなかなか寝付けずにいた。

毎日来ていた「おやすみ」のメールが来なかったから…。

ミクの胸に不安な影が広がる。

何でもないリュウタと彼女の一日が、

何だか特別な日に思えた。

そして次の日また見ちゃったんだ…。

リュウタと彼女のメール。

やめとけばいいのに…なんてバカなんだろう？

ミクの心を汚染する嫉妬と言う魔物。

あの時あんな事言わなければ、

あんな物見なければ…。

ミクの頭にハッキリと芽生え始めた気持ち。

せめて“浮気相手”くらいにはなりたいよ…。

あまりにも切なくてはちきれそうな願いだった。

ミクの心は揺れていた。

時計の針は狂い出している。

もう昔には戻れないの？

心に広がる魔物（後書き）

ミクの運営するサイトです。ここから小説と日記

がみれます PCで見ても <http://www.rak1.jp/>

[p/one/user/pandasexy/](http://www.rak1.jp/p/one/user/pandasexy/)

優しい(?) 嘘つき

次の日リュウタの部屋はやっぱり何かが変わっていた。

片付けられた机、キレイに並べられた雑誌に、何となくさっぱりしたベット周り。

それからTVの上に何故かハート形のプレゼントの箱??が飾られて…。

あきらかに彼女の空気が漂ってる…。

私のパンダのぬいぐるみもいつのまにかクローゼットに戻っちゃってるし。

(なーんか嫌な気分!!!)

もちろん文句は言えない。

彼女が家に来て掃除したからって何にも問題ないし普通だし。でも何となくベットには目がいつてしまった…。

2人はこのベットで昨日、どんな風に何をしてたんだろう…。

気になる!!!

リュウタの唇の感触や、華奢な体を何となくだけどずっと覚えてた私は、

何となくリアルな妄想が頭に広がってしまった。

もちろん口出しできる立場ではないんだけど、やっぱり彼女の存在は妬ましい。

私にそんな権利はもちろんだけどね。

そして、人の気なんて知ってか知らずか、（たぶん知らない。）
リュウタもまた今日は一段とおしゃべりだ。

「彼女が来ててもする事なんて特にないしさあ、掃除とか始めたら何か全部やりたくなくなっちゃて。」

私はいかにも興味なさげに「ふーん。」と答えた。

「ほら！」

彼はTVの台に足をかけると、身軽にエアコンに手をかけて、

「こんな所までね。」

ピカピカのフィルターを見せていつもの笑顔を浮かべていた。

「本当だ。」

確かに彼女の仕業ではなさそうだ。

でも何かそんな会話をしている自分達がちょっと間抜けに思えた。

何かイライラする…。この状況…。

なぜかってやっぱり、ハートのプレゼント箱や、おやすみのメール
がなかった事や、それからそんな
細かい事が気になる自分や、文句を言えないこの立場や…。

うん、色々ある。

それにやっぱり彼女が久々に来て、そんな状況なはずがないと思っ
ていたからかな。

別にいいんだよ。

だって私はそんな事承知で今日も来ているんだもん。

だけど、「掃除してて…」なんてずっと話してる彼の態度も何だか
腹が立つ。

もちろん「昨日エッチしてたらさあ」なんて普通に話されたら気分悪いし、
自分もそんな事聞きたくないんだけど…。

でもこんな会話って（なめてんの？）なんて思っちゃう時もある。
もちろん口には出さなかったけど。

それから、彼はしばらく“昨日は大してやる事なかった話”を続けた。

やましい事があつた言い訳か、気を使ってくれたのかもしれない。
そんな感じで、せっかく彼が色々話してくれたけど、私は全部興味
なさげに、

どーでもよく「ふーん。」と返していた。

鈍感な彼も、さすがに今日のミクは機嫌が悪いらしいと思ったのか、
「ちょっとトイレ…」なんて、部屋を出て行った。

私は一人ベットに転がって、
ため息まじりに彼の部屋を見渡してみる。

あの頃…彼の家が新しくできたのは、確か中学一年の終わりくらい
で、

もちろんこの部屋に初めて入った女の子は私だったはず。
家具の配置も、心地よい木の温もりも、暖かい日射しや香りも、
何も変わらないのに、この部屋はもう全然居心地のいい部屋じゃな
い。

窓辺をすり抜ける風邪が風鈴のいい音色を運んでいるけど、
その風鈴をあげたのが私だって事も彼は絶対覚えていないだろうな。

この部屋を埋め尽くしてるのは、違う女の子と彼との時間なんだ。

私の居た時間は、もう昔話でしかないんだなって思うと、
まだ会った事もない彼女の存在に対して、

“嫉妬”や敵対心を感じずにいられないので、また悲しさが増した。

彼を手放した事、いっぱい反省するから、彼を私に返してちょーだ
い…！

そんな事口にしたら、千理にぶんなぐられるだろーなあ。なんて…。
ぼんやり天井を見つめながらそんな事を考えていると、
聞き慣れたメロディが耳元でまた鳴ったんだ。

確かコレはミスチルの「抱きしめたい。」かな？
たぶん千理が設定した、彼女専用の着信音。

今最も聞きたくない、超耳障りと言っていい音楽。

「も〜@@¥ ！！」私は重い体を引きずる様に、携帯に手を延
ばして、

枕の下に投げ込んでくれるリュウタはまだ戻って来てなかったから、
うるさいし、とつと音を消そうと携帯を開いた…。

たった数秒が待てないくらいイラついていた。（早く消えろ！！）

でも、こんな時って悪い偶然（むしろ必然なのかも。）が重なる物
で、

適当なボタンで音は鳴りやんだけど、うっかり彼女のメールを開い
てしまったんだ。

（またやっちゃった…。）

そして、そのメールは、私を最低最悪な気分突き落とす事になる。それは、例えば、鈍器で殴られた様な、頭がカチ割れる様な、頭痛が走る朝の様な、要するに、平気じゃいられない、怒り？嫉妬？何？解んないけど、嫌な感じ。

彼女のメール。

最初はまあ、昨日はたのしかったよ〜とか普通のメールで、悪かったのは最後の一文。それさえ見なければ、私の人生は変わってたのかもしれない。大げさかもしれないけど、それくらい私には刺激の強い文だったんだ。

【まあ、昨日はお風呂ですごい気持ち良くしてもらったし、許してあげる。またしよーね。】
なんて感じ…。

ブチン…！！いや、カチン！！かな…。

私の頭で、何かが確実にキレル音がした。

いいよ、別に、恋人同士何しようが関係ないよ？勝手にやればいいよ…。
自分に言い聞かせるけど、コントロールがステに効かない状態だった。

何で…

どうして…

私をコレ以上悲しませて何になるって言うの…？

辛い、痛い、どーしようもない。

その時すでにミクの目から、自然と涙が出て来ていた。

私は弱気な上に涙もろかったから、

今日までこらえて来れた事自体すごいくらいだったんだけど…。

そしてその後は次から次へと涙が出る一方だった。

部屋に戻ったリュウタはそんな私を見てもちろん驚いた。

「何？どーしたん？」

リュウタは慌てて辺りを見渡す。

転がってる自分の携帯を見つけると、

怒るのも忘れて“しまった！”って顔をした。

「見たの？コレ…えつとお…ごめんね。」

ワケガワカリマセンが？

必死になだめてくれる彼の事が何だかとっても滑稽に思えた。

別に悪い事もしていない癖に謝る彼に余計腹が立った。

「何で掃除とか言うの？本当の事言えばいいじゃん！バカ！！」
それから私は彼と再会してから、初めて声をあげて泣きだした。

最も昔はこつやつてバカみたいによく泣いた気がする…。
あの子と仲良くしたから、適当に返事したから、後輩にラブレター
もらったから…。
色んな時、色んな事でよく怒った。

でも…

今はそんな風に泣ける立場じゃないって知っている。
だから泣けなかった…けど泣いた。

リュウタは「落ち着けて」と困った顔をした。

「私の事どうおもってるの？何とも思っていないならつまらない嘘付
かないでよ！」

「別に嘘じゃないよ。ただ、言うのも変でしょうが。」

（確かにその通りだ…。）

「私を好きって一体何？わけが解んないよ。」

（全くその通り。）

そして私は自分が昔彼に宛てて書いた手紙を思い出していた。

リュウタは本当に私を好きでいてくれるの？私ばかりがこ
んなに好きで、一生懸命なのはどーして？

まさにその心境だった。

リュウタは元々女の子の扱いには慣れていない方じゃなかった。あの頃も、そこそこモテていたけど、女の子に優しくする方じゃないし、気の効く方じゃなくて、こんな時どーしていいか解らないんだろう。

そーゆう不器用な彼が好きだった。

…でも、さすがにもうしんどいなあと思った。

リュウタはとりあえずTVを付けた。

私はめつたに怒らないけど、一度怒ると、何も喋れなくなる人だったし、

リュウタも都合が悪いとだんまりで、お互い言葉が見つからないから、

この部屋にTVがあつて本当に良かったと思う。

勿論2人ともTVの内容なんて耳に入っていないかった。

無意味な雑音でしかなかったけど、とりあえず重い沈黙をTVが埋めてくれて、安心した。

ひとしきり泣くと、私は少し落ち着きを取り戻していたけど、やっぱり空しさは消えなかった。

「大丈夫？落ち着いた？」

リュウタがきまずそうに顔色を伺って来る。

「うん、ごめん。」

「いいよ。」

それから私はまた聞いた。

何かどーでもいい気分だった…。

「ねえ、私を好きって言ったのはなんだったの？友達としてって意味？浮気相手としても見てくれないの？」

リュウタは予想どおり困った顔をして、

「解んない……」

と言葉を濁らせた。

でも彼はとても不器用だった。

別に本当にだまそうとかそんなつもりじゃないんだろう。ただ、本当に言葉が見つからないといった感じだった。

それから再びリュウタがTVに目をやるうとする。

（何で私を見てくれないの？）

リモコンを取り上げてTVを切ってやった。

だけどもまた、恐ろしい程の沈黙に包まれて、私まで途方にくれてしまっ。

でも何か喋らないと必死だった。

それからミクは、ゆっくりと自分の話をし始めた。

「あのね……。」

「うん。」

「私、まだ処女なんだよね。」

「はあ？マジで！？」

リュウタはビクビクして目を見開いている。

「嘘……とっくにかと……」と言ってまた黙り込む。

確かに嘘じゃない。
ミクは処女だった。

中学生の時点で、リュウタとも途中までしていたし、
高校に入ってからだって何人か彼と呼べる人はいた。

だけど皆“途中止まり”なぜかってやっぱり痛そうで怖かったのと、
そこまでその行為に興味が湧かなかったのが原因。

もっと人として深く繋がってられる様な彼が欲しかったし、
ソレをしてしまうと、先にはもう心のつながりはなくなってしまっ
気がして魅力を感じなかった。

で、気付いたらもう18にもなってしまったのだ。

要するに、すごく幼い女の子だった…。

「引く？こーゆう子は好きになれない？」

私が悲しそうな目を向けると、リュウタは慌てて、

「なんでそんな事言うの？別にそんなのいいじゃん。」
そう言ったけど、

何だか私はリュウタの彼女よりもずっと自分が子供で、
女として劣っていると感じてしまったんだ。

そーなるともう自分がみじめで価値さえない気がしてしまう。

悪い癖。

それから、

「浅田くんとかとして来たらどーする？」

冗談ばく聞くと、リュウタは少し怒った様に、
「やだよ！」と言った。

一瞬嬉しかった。
けど、

それはお気に入りのおもちゃを他の子供に貸したくないとか、
欲しかった服を友達に先に買われた…みたいなそーゆう「嫌」って
いう程度しかないんじゃないかって私は思った…。

好きと言う一つの言葉の中で並んでいても、私達は対象じゃない。
ふ揃いでガタガタ…左右比対称。
だからこそ、こんなに好きになれて、美しいと思っちゃうんだろう
か？

私の気持ちだけがどんどんはみ出して形を崩してしまうのが解る。

リュウタはきつとこんな私を好きになってくれない。

あゝ自信持てるわけない。

「あの頃拒まずやってれば良かった。」
「何言ってるの！」

リュウタの表情は、ますます気まずそうに困った笑顔で強張っていた。
った。

あの頃も、

そして今も変わらず、

キスも、

もちろんエッチもなしに、

ただ隣に並んでいた私達。

キレイだったよね。

汚い物は見なくて良かったし、そーゆうの純粹っぽくて…。

でも女と男だから、やっぱりそれじゃ一つになれない。
こんな私を彼女より好きになってくれるわけないじゃん。

「今日はもう帰るね。それで浅田くんとか誰かに処女でもささげてくるか。」

「何言ってるの、お前アホだなあ。」

「アホだよ。アホだしバカだよ。別にあんたの彼女でも何でもないもん、関係ないじゃん!!」

リュウタはまたおしだまっってしまった。

「じゃーね。」

軽く肩を叩いて部屋を出る。

自分でも飽きれるくらい嫌な奴になってる、
でも他にどんな態度をしたらいいか思い付かないし…。

「バイバイ。」

「…うん。」

私はその時

この恋はもう絶対に動かせない。
もう駄目だって思ったよ。

もう彼に期待する事も、自信を持つ事も、

我慢も限界だったんだもん。

もう終わったってその時は本気で思ってたんだ。

最後の奇跡

リュウタの家を出て、
熱くなったハンドルを握る。

どこへ行くこう…。って考える。

この恋は終わったの？
終わったよね？

リュウタの困った顔、
彼女の気配が残る居心地の悪い部屋で泣いていた自分。
今日は本当に最低な日だった。
最近どんどん冷静さを失っている。

だからもう会わない方がいい。

それに…。

どんな顔して次会えって言うの?? 解んない…。

ミクはとりあえず、休みがちだったバイト先に顔を出して、夏休みのシフトを入れた。

夏休みはきつと一人で過ごすから…。

それから、大樹と多香子に今日の出来事を電話で報告する。
慰められて少しホッとした。

最後にあの桜の公園で、もう花の付いていない、葉っぱだけの木々を眺めたりして帰った…。

リュウタが居なくてもやる事は沢山あるんだから…。

机に目をやると、

山積みの課題が散乱していた。

課題の提出は明日、終業式の後。

コシを出さないと追試が受けられない、

自動的に留年決定と言っわけだ…。

ミクは重い体を机に向かわせる。

(何だってこんな気分の時に限ってこんな物やらなきゃいけない
だろう???)

課題は教科書を丸写しするだけの簡単な物だった。

頭を働かさなくてもできるからちよつとありがたく感じた。

だけど、それは本当に莫大な量で…。

今までどれだけ自分が彼に振り回されていたか思い知る。

チクタク時計の音が耳に響いては消えて行った。

どうして、終わらないの？

甘く見てた…。

何もかも…。

恋も…。

ミクの頭の中を色々な気持ちが交差して、ますます気持ちは落ちて
行った。

別れたってまた運命が重なれば巡り会えるって思ってたし、

彼女がいたって本気になれば想いが伝わるなんて…甘い気持ちでまた彼を好きになった。

甘かった。

私が悪かった。

もう…

彼とは…

終わったんだ…。

ミクの手は止まっていた。

やっぱり課題どころじゃない。

バイトとかも、何か違う。

やる事は沢山あるはず…。

でも、違うんだ全部。

知ってる、解ってる。

彼がいないとこの世界中も、

これから来る夏さえも、

無意味。

駄目なんだ。

私の心の中に悲しい気持ちがどんどん広がって行った。
もう彼と顔を合わせたくない。
だけど…

悲しいよ…。

課題はちつとも進まないまま時計の針だけが進んで行った。
もう夜中の1時を回ろうとしている。

もしも…今彼が私に会いに来てくれたら…。

ミクの頭はやっぱりリュウタの事でいっぱいになっていた。

神様がいるならもう一度彼と…。

…そしてその時、奇跡は起きた。

机の上、散乱する課題の山の中からオルゴールの音楽が流れたんだ。

リュウタの着信音。

もう鳴らないと思ったし、鳴らすのもやめようと思った彼の音。

出る？出ない？

(そんなの決まってる…。)

ミクは深呼吸をして携帯を手に取った。

「はい、もしもし?」

精一杯普通の声のトーンを装って、何でもないフリをする。ただ、彼が逆に普通じゃなかった。

かすれた様な弱々しい声でいつもの明るくて威勢のいい彼の声とは明らかに違っていったんだ。

「どうしたの?何かあったの?」

私はすぐに彼の異変に気がついた。

リュウタのかすれた声が小さくつばを飲みこんだ後こう言った。

「俺、彼女と別れたから…。」

…え???

「さっき彼女と別れたんだ、もうお前とは無理だからっていったんだ。…今すぐ会いたい。」

リュウタの細い声は、まるで泣いているみたいで、

小さい動物の様なとてもか弱く今にも消えてしまいそうな程震えていた。

「どうして?昼間私に変な事言っただけ?」

「違うよ、ちゃんと考えて…。でも…」

彼の声がかすれて濁る。

「でも…何?本当にそれでいいの?大丈夫なの?」

リュウタの震える声が、ミクにも同じ様に不安を感じさせた。

どうしよう…どうしたらいいんだろう？？
解らなかった。

リュウタが小さな声でつぶやいた。

「寂しい。…お願い側に来て。」

いつも強気な彼の態度はどこにもない。

ただ、ちっぽけで消えてしまいそうな光の様に、彼の存在を尊く想った。

リュウタがどんな気持ちで電話をかけて来たのか、そして、私はこの先どうなるんだろう？

頭を過る色んな気持ち。

言葉ではうまく言えない感覚。

私は初めて感じたんだ。

（こーゆーのを愛しいって言うんだろうな。）

リュウタの辛さなんて解らない。

私、今最悪な人間になってる。

だって、彼がまた電話をくれて、彼女と別れたって言って、私を頼って、弱くて、小さくて、そんな彼にこんなにも…。

ドキドキしている…。

こんな時人間って本当にずるい生き物だよな。

こんな気持ちになるなんて、
自分って嫌な奴だよなって本当思うよ。

「私、前言ってた課題明日までだから、終わってからしか行けないよ？」

(本当はいますぐ行って触れたいけど…。)

ミクの返事を聞いて、リュウタは催促する様に念を押した。

「いいよ、待ってるから、早く来て。」

私はそんな彼をとて愛しく想っていた。

「解った。待ってて。」

私は山積みの課題を猛スピードで片付けた。

それから、2人でやってもばれなそうな課題をカバンにほうりこんだ…。

この貴重な夜が終わってしまう前に彼の家へ行くために。

それから、部屋にあった制服を適当に着て、

原付きのエンジンをかけた。

親に見つかって止められたけど、そんなの知らんフリだった。

AM 12:30。

ミクは通い慣れた道をいつもよりスピードを上げて走って行った。

リュウタの消えてしまいそうなその光で、

私は自分の未来を必死で照らしていたんだ。

通い慣れた道は驚く程遠く感じたけど、
誰も居ない真夜中の道も、
その時のミクには全然怖くなかったよ。

A M 1 2 : 3 0

彼の家をもうすぐ見える。

真夜中のときめき

真夜中は…

不安を感じさせる重たい闇に包まれて…

だけどその先に…

明るい朝を予感させる不思議な時間でもあった。

(彼が心配だよ。)

だけど、それとはうらはらに、

ドキドキしてた。…期待してる自分。

(ごめんね、辛いよね。でも許して…。)

だって本当はずっと待っていたんだもん。

彼の口からその一言を聞く日を…。

「彼女と別れたよ…。」

改めてリュウタは私に言った。

「うん。」小さく返事を返す。

私はどんな顔をすればいいか迷った。

悲しげな彼の表情とはうらはらに私は喜びを感じずに居られなかったから…。

とりあえず彼の隣に座る。

昼間と何も変わらないリュウタの部屋。

ただどさつきまでなかったはずのお酒の缶が転がっている。
あんまりお酒は飲まないって言ってたくせに…。
そんな彼がいじらしくて、私まで切なくなった。

「飲んでたの？お酒駄目でしょう？」

リュウタは瞳を潤ませながら、堅い笑顔を作った。

「何かね。いいじゃんこんな気分の時もあるよ。」

そう言っつてうつむく瞳はとても悲しく見えた。

「そうだね。わかるよ。」

ミクも笑顔を浮かべた…。

それから、どうしたら彼が彼女を忘れてくれるのか、
頭の中はその事でいっぱいになった。

(彼は今、何を想うの…??早く彼女を忘れて…。泣かないでよ。)

ミクはリュウタの髪をなでた。

リュウタは何も言わないでうつむいている。

「辛いよね…。二年もつき合って来た彼女だもんね…。」

「そりゃ…やっぱ、少しは…。」

リュウタは必死で何かに耐えているみたいに遠くを見ていた。

ミクの中にも、期待と不安、それから罪悪感もちろん、
彼と同じ様に複雑な気持ち広がっていく。

二人の間に割り込んでしまった事。

それから彼に悲しい想いをさせてしまった事。

本当にコレで良かったかなんてやっぱり解らない。

だけど、もし、彼が今私を選んでくれるなら、その罪悪感も、不安も、一緒に背負ってあげたい。私はそう強く心に想ったんだ。

(だからお願い…。もう迷わないで。)

私を好きになつて…。

喉越しまで出かかっていたその言葉を飲み込んで、ミクは黙って彼に寄り添った。

それからしばらく二人で並んでTVを見たり、課題をかたづけたり、いつもの様に、何でもない時間を過ごした。

彼は努めて平然を装っていたのかもしれない。

それでも私には、とても尊く、幸せな時間だったんだ。

こんな時間がこれから先ずっと続いてくれたらいいのにつて、強く強く想ったよ。

今ここにある幸せな時間だけが明日に続いたらどんなにいいだろう…。

早くリュウタが彼女を忘れてくれて、

自分も幸せになれたら…。

ミクはそつと彼に近付いて、二人の距離はとても近くまで来ていた。リュウタももう、それを拒む事はなく、私も彼を怖いと思わなくなっていた。

「ねえ…」

リュウタが小さな声でささやいた。

「何？」

顔をあげると、すぐ側まで彼の顔が近付いている。

ミクは自分の鼓動が早くなるのを感じていた。

そして、リュウタの細い髪が、かすかにおでこに触れた時、彼の口からついにその言葉を聞く。

「キス…してもいい…？」

まるで、初めての感触。

ミクの体中に、熱くて激しい気持ち走った。

ミクも彼の頬に触れて答える。

「駄目なわけないじゃん？」

潤んだ彼の瞳と目を合わせると、

彼に力強く引き寄せられて、

…そして、ゆっくと、お互いの唇が重なった。

煙草の苦い香りが広がり、

舌を絡ませる度、その香りでミクは酔いそうになる。

頭の中では、過去の記憶が広がった。

それは、もう忘れてしまいたいくらいのも彼のキスの記憶。

13歳で、初めてキスをしたあの日、それから、観覧車のキス、花火の時も…。

どれも素敵な出来事なのに、幼く、子供じみていて、
だけど、どれもキレイな思い出で…。

それから、いつしかそんな事にも慣れて行き、彼を手放した日の事も…。

全部思い出した…。

沢山の記憶が蘇る。

私の心を、体中を満たして行くこの気持ち…。

沢山の後悔や罪悪感と一緒に、止まっていた時が再び動き出そうとしている…。

もう迷う事はない。

ミクにはリュウタ、そう、ただ一人だよ。

まるで初めてキスをした時の様に、ミクの心は高鳴っている。

何人もとかわしたどのキスよりも、今、彼の唇は私を惑わせて、揺さぶっている。

それは幸福を案じさせる、小さな奇跡にも思えた。

明日も明後日も、その先も…。

ずっとずっと感じていたい。

なんとも言えない気持ちだった…。

そして彼の手が頬を離れ、しずかにミクの服に滑り込む。

「いい？」

「うん。大丈夫。」

ミクはもうどうなってもいいと思った。

「だけど…。」

「ん？」

リュウタが不思議そうな顔でこっちを見ている。

ミクの心はもう彼の物、でも彼の心はどこにあるんだろう…。

それだけが心配…。そう、あとはそれだけ…。

「ねえ、本当に彼女の事はもういいの？もう他の子と…やってしないの？」

リュウタはあいまいな笑を浮かべる。

（お願い、もう私だけだと言って…。そしたら安心して、リュウタの物になるから…。）

でも彼は、やっぱり答えなかった。

その時彼の中にはまだ、迷いがあったのかもしれない。

仕方…ないか。

それ以上はもう考えない事にした。

「やっぱり…やめようか？」

リュウタは静かに手を離そうとした。

「ごめん、違うの。何でもないから！」

「そう…?」

「うん、」

「やめないで…。」

「解ったよ。」

リュウタの力にまた引き寄せられる。

安心する…。

今度はミクから彼の首に手を回して、

リュウタの細い髪、

色白な作り物みたいにキレイな体をゆっくり確かめる。

声も、指も、全部が全部。

触れる度に心地よくて、懐かしくて、でも初めての感触。

今だけは、嫌な事も全部忘れられる気がした。

今はこれでいいんだ。

きつと大丈夫。

ミクは自分に言い聞かせてた。

「リュウタが好きだよ。」

そしてその夜、リュウタの体の重みと、

その手や、唇の感覚は、ミクの理性やプライドまでもどーでもいい
と思わせた。

時々耳元で彼の息がもれる度、ミクは頭がおかしくなるくらい興奮
させられたんだ。

時々見た事もない彼女の顔が私の脳裏を過ったけど、
彼も同じ様に彼女を思い出しているんだろうか…。

ここは天国なの？

それとも地獄なの？

もうどーでもいい。

長い空白を埋める彼、唇、声、その全部で、

ミクの頭は空っぽになる。

彼以外の世界はもうぼやけて見えなくなってる…。

長い夜…。

ミクの心はもう完全に彼1人の物。

きつとこの先もずっと…。永遠に…。

長い夜の暗闇に浮かぶ、曖昧な光。

そのかすかな光に導かれて、

新しい朝を探すんだ。

その夜、ミクの心の中は、

幸せな彼との未来でいっぱい埋め尽くされた。

明日はどんな日が待っているのかな？

明日が来る事があんなに待ち遠しいと思ったのはきつと初めてだった。

マボロシ

寝不足の目にしみる朝の太陽。

どうでもいいけど、どうして朝はこんなにだるいのか…。

ミクは考える。

真夜中は本当に不思議。

まるで魔物でもいるんじゃないかってくらいあまりにもドラマティックな感覚。

それなのに、太陽が顔を出したとたん、夢は終わって現実に戻されると、

髪もボサボサだし、何だか間抜けな顔の二人…（現実なんてこんな物か…。）

「眠い…。」

「俺も…。」

二人は重い体を起こして、乱れた髪を直す。

「そんで、今日学校行くの？」

リュウタが聞いた。

「まあ、今日行かないとヤバいから。終業式だし。」

そうは言ったけど、課題さえなければ絶対さぼりたい…。

時計を見ると、もう朝の六時近くだった。

「そろそろ母さん起きるかも…。」

「マジで?」

「うん、そろそろね〜。」

リュウタは布団を頭までかぶってもう一寝入りしようとしている。

一足はやく夏休みに入っていたリュウタの学校が疎ましい。

(本当はもっと一緒に居たいのにな)

でもやっぱり、現実には恋だけじゃなくてやらなきゃいけない事が
沢山用意されている。

それに、彼はもう彼女と別れたんだもん、焦る心配はないか…。

自分にそう言い聞かせると、

制服を着て化粧を直し、散らかっている課題を乱雑にカバンに詰め
込んだ。

彼は布団の中からその様子を見ている。

ちよつと腹立たしい。…でも、こんな時間が何だか愛しいと思った。

「ねえ、本当に行くの?」

リュウタが甘えた声で聞いてくる。

「行くよ。これで学校休んでたら今度こそ親に殺されるって。それ
に、リュウタのお母さんにはち合わせるのもさすがに嫌だしね。」

「そりゃそうだ。」

リュウタはいたずらな子供の様に目を細めて笑った。

あーなんて幸せな朝の光景だろう…。

私は何だかうれしくて仕方なかった。

彼は、余韻に浸っているミクの腕を、ベッドの中から掴んだ。

「ねえ、今夜また会える?」

無邪気な彼の笑顔に、自然と笑がこぼれる。

「じゃあ、学校終わったらまた来るから、ちゃんとそれまでに起き
ててよ。」

思わず口元が緩む。

「はいはい。」

リュウタも笑顔を返してくれた。

「あー、あと昨日やってたゲーム私が来るまで進めないでね!!」

「解ったよ。」

ミクは急いで彼の家を出た。

何でもない普通の会話を交わす。

当たり前前の幸せ。

私はこの時何も疑わなかった。

彼から次の約束をしてくれたし、こんな日がこれから続くんだなって素直に信じてた。

安心してしまった…。

でも…実は、この夜には一つだけ問題があった。

だけど、明日もリュウタとの関係が続くと信じているミクにとってそれは焦る必要もない事だったんだ。

(今日が駄目でもこれから毎日会えるもんね。大丈夫…。)
そう思ったんだ。

「で、その問題とは何!?!」

学校へ着くなり、さっそく菜穂達と机を取り囲んで会議が始まる。

「えーと、まずコレはどーゆう事ですか?ミクさん?」

未織がミクの首元を指差した。

首元にはくつきり赤いあざができている。

「うわっ!!…いつの間にかーゆう事になっちゃっわっけえ!!…キス

マーク付けるなんてやらしい！」

菜穂が頭を抱えてる。

「本当だ。」（自分でも気付かなかった…）

「一人だけずるいよ!!」

「で、彼と最後までしたんでしょう??どーだった？」

皆朝から好きな事ばかり言ってる…。

「別にどーって事ないよ。」

私がそう答えると、

「余裕ぶるなつて!!あんた処女のはずでしょーがー!どっつて事
ないわけないでしょう!!」

菜穂が何だか興奮ぎみになっている。

でも実は…。

「最後までしてないんだよね。」

「え?!」

黙って聞いていた亜子も、何だかフに落ちないと言った感じどころ
ちを見た。

そう、最後までしてない。

要するに、処女だし痛いし、朝来ちゃうし、

中途半端な状況で…。

ミクとリュウタはまだ一線を超えていなかった…。

「えー!ー!ー!ー!ー!」

あんのじょうそんな反応…。

「そんな驚く事？」

「そりや驚くでしょ！！あんたバカ？」
菜穂が切れている。

「なんで今更拒むのよ。」

「違うよ本当に！あたしだってしたかったよ！でも、何か朝になつてたし、痛いし。」

不機嫌そうな菜穂に今度は亜子が口を挟む。

「ミクは菜穂と違って純粹なのよ いいじゃない、今日じゃなくなつてコレから時間はあるんだから。」
私もそう思う。

だけど菜穂は納得いかない顔でこちらをにらむ。

「やってない上、つき合うって約束したわけでもないんでしょ？
それって大丈夫？」

「大丈夫、だって別れてくれたって事は私とつき合ってくれるって事でしょう？」

「まあ、そうだけど、そんな簡単にあの女と切れるかな？」

「そ…それは…」

「男はやっぱり気持ちだけじゃ繋がっていられない生き物だと思うよ、ちゃんとした事実を作らなきゃ、いつでも前の女のところに行っちゃえるんだから、次はちゃんと最後までした方がいいよ！」

「そっかあ」（確かについて思った…。）

ミクは決心した。

今夜リユウタと昨日の続きをして、
ちゃんとこの先の答えを聞こうって…。

大丈夫、彼を信じてる。

もう少しで、私達、恋人同士に戻れるよね。

ミクはこの時まだ気づいていなかった。

彼の心が今、どこにあるのかを…。

接触

灰色の景色、歪んだ気持ち。

明日、希望、永遠や約束。

あいまいな物なんて大嫌いだった。

だって信じて裏切られるのって怖いでしょう???

だけどミクは解ったんだ。

信じられないからこそ信じたい事もある。

例えば彼との事、永遠とかって言葉も…。

今日は結局終業式とHRだけだから学校が終わったのはまだ午前だった。

退屈な担任の話が耳を素通りして行く。

窓の外はもう夏の熱気に包まれていた。

誰もが明日からの夏の予定を思い描いてる。

ミクも例外じゃない。

はつきり言って浮ついていた。

今夜の彼との会話、それからまた花火と一緒に見れて、

彼のバイクが来たら一番に見せてもらう事。

他にも沢山！

想像は尽きない。

彼の隣で手をつないで歩きたいな…とか。

勝手な妄想で胸がいつぱいになる。

(千理は今頃どうしてるのかな？夏休み初日から可愛そう。)

…なんて

ライバルの心配までしてみる自分。

本当にのんき。

…でもうれしいな。

今日ばかりは皆ホームで溜まって喋る事もない。

菜穂達も大人しく反対方面の電車に乗って帰って行った。

ミクと亜子も寄り道せずには電車に乗って、

それぞれに思い思いの夏休みが待っているんだろうな。って考える。

今しかできない、若くて、幼くて、きっと人生で一番の夏の始まり。

18の夏、もう2度と来ない最高の季節になるかもしれない。

大好きな彼と再び巡り会えた事で、

ミクの胸もいつそう期待で膨らんだ。

「今日は何だかいい顔してる。本当うつつとうしーよアンタ。」

亜子にほっぺたをつねられて、ミクも亜子のほっぺをつまみ返す。

二人で変な顔をしながらクスクス笑ってはしゃいだ。

流れる景色や町の風景もキラキラ輝いている。

電車の中は楽しそうな学生でにぎわっていた。

「リュウタくんとは何時に会うの？」

「うーん、解んない。でも夕方かな？」

「去年行ったかき氷のお店がまた始まったらしいよ、時間あるなら寄ろうよ。」

「いいねー 化粧直してから帰りたいし。あそこならすぐ帰れるしね。いいよ。」

ミクは機嫌良く誘いに乗った。

「やったー、決まり」

(楽しいな。)

ミクは友達が大好きだった。

この季節も、おいしいお店に寄り道する事も、バイトも、恋も。

何もかもが揃った気がして、心満たされた日だった。

(こんな日が明日から続いたらどんなに楽しいだろうな。)

幸せと言う、形のない物をミクは信じてもいいかなって思い始めていた。

あんなに期待しないって決めてたのが嘘みたいだ。

でも、そんなミクの心のどこかにはやっぱり不安が残っていたのかもしれない。

そして、それはもう、すぐ近くまで近付いていた。

私の知らない所で、黒い影は確かに広がっていたんだ…。

流れる景色、にぎわう車内、ミクと亜子を包んでいた楽しい気持ち、一通のメールから全て崩れて行く。

それは彼からの一通のメール…。

電車は長いトンネルを抜け、圏外だった携帯の電波が二本になる頃だった。

ミクの携帯がいつもの着信音を鳴らす。

「噂をすればリュウタくんじゃない？」

亜子がニヤニヤ携帯を除いた。

「うん、そうみたい」

「じゃあ、亜子が読んであげるよ。」

携帯を手に取る亜子。

フォルダを開いたとたん、

彼女の顔は、まるで自分が告白でもされたみたいに赤くなる。

「ねえ、何て？」

私が覗き込むと、何故か亜子が照れながら読んでくれた。

【声が聞きたい、電話して！】だってー！！！！

「え！？」

予想外な内容に私も思わず赤くなる。

「やだ、ラブラブじゃん。もう心配いらないね。」

亜子にひやかされて私も恥ずかしくなった。

「やだ、こんなの冗談だよ、そんなキャラの人じゃないから。」

そう言いつつもついついにやけてしまった。

まさか彼がこんなの送ってくるなんてまったく予想外な出来事だったから。

でも浮かれていた私達はそんな事深く考えなかった。

彼も浮かれてる。

勝手にそう思っただけ。

私は亜子にせかさされるままリュウタに電話をかけた。
すぐさま彼に繋がった。

私達は何となく嬉しくて顔を見合わせた。
受話器の向こうから声が聞こえる。

「もしもし…。」

その瞬間だった。

黒い影が私を包み込んだ瞬間。

ミクは携帯を握りしめたまま言葉を失っていた。

「ミク???どうしたの?」

亜子の不思議そうな顔を今でも忘れない。

さっきまでの穏やかさはどこに行っちゃったのか?

私は黙って亜子に携帯を渡した。

数秒後、亜子も同じ様に青ざめる。

電話の持ち主はリュウタじゃなかったんだ。

確かに番号は彼の物で、彼の携帯に間違いないんだけど…。

聞き慣れない高く細い声、

その声の持ち主は、今までに一度も聞いた事のない声で、
だけど確かに私は知っている。

甘えた様になかったるい口調。

かわいらしく振舞えそうな器用そうな女の声。

耳障りで、大嫌いな声。

初めて聞いた…でも解る。

私と同じ様に彼女も何となく正気じゃない。

その声は千理：リュウタの彼女、
それ以外の誰でもなかった。

「パンダちゃんね、引つかかると思った。私、誰だか解るよね？リ
ユウタくんの彼女です。」

甘ったるくて耳障りな細い声、
どうして彼女が電話に出たの？

頭が混乱して、思わず電話を切った。

その後すぐに彼からメールが入る。

【彼女が勝手にメールして、電話した。本当にごめん。】

ミクと亜子は顔を見合わせた。

二人は同じ事を考えていたと思う。

今度は誰が打ってんだ??????

リュウタの事が信じてあげられなかった。

どうして彼は今彼女といえるの？

どうして別れたのに“彼女”って呼ぶの？

今電話に出たら私はどうなっちゃうの？

二人は何をしているの？

【本当にリュウタなの？誰がメール打ってるの。不安だよ。夜家電から電話ちょうだい。今は電話出れないよ。】

せいいっぱいの言葉だった…。

冷静で居られなかった。

楽しそうににぎわう学生達の声が、もろろと遠くで響いてる気がした。

言葉にならない。

ミクは考えていた。

あの細くて甲高い、でも強く震えるあの声。
考えはまとまらない。

いくつも数える彼との記憶。

出会って、恋をした。

好きになってつき合った。

キスをした。

別れを告げた…。

でも、彼を忘れる事はなかった。

自分勝手にまた巡り会った。

数少ないメールと、何でもない会話。

一晩だけのキス。

でも、彼の心は、

最初から最後まで解らなかった。

彼女からの電話。

手が震えて、言葉が見つからないのは、

彼女の怒りが、自分のずるさが、彼の気持ちか…。

とにかく、二人をめちゃくちゃにしようとした自分が…。

間違っている…と、
知っている…から？

本当はね、始めから解っていたんだよ。

これはいけない事だつてね。

自分でも苦しかったんだよ。

もしも彼女が自分だったら、彼を許せないし、

彼ともう一度つき合ったって、

彼女と同じ様に、彼の心の中に誰がいるのか心配になるだけ。

彼はそういう男。

でも、ソレがたまらなく魅力的で、
たまらなく好きだった。

彼の言う彼女の行動はどれも理解できなかった。

彼を束縛して、自分の側にずっと置いていたくて、

彼のプライベートを探って…ただ、自分の物にするために…。

いつも反発した。

あんな女と一緒にしないで。

あんな女には絶対ならないから。

あなたをもっと自由にさせてあげる、

だから…

私は何をしようとしていたの??

だから、私の側にいて。
私から離れず、ただそこにいて。
私を置いて行かないで…。

本当は気付いているの。

私はあの子と同じ。

自分勝手にただ、わがままに、

あなたを離したくなくて、

ただ、それだけの為に、

彼女を無視して近付いたし、

あなたにいくつもの嘘をきつとつかせた。

あの子と同じ。

あなたをととても深く愛していて、

そしてあなたをととても苦しめてしまう存在だったに違いない…。

ぶっきらぼうで、適当で曖昧なあなただけ、

本当は不器用で優しい男の子だった…と思う。

優柔不断だし、バカばかりして、

だけど、私達を決して傷つけなかった彼。

嘘も、いいかげんな約束も、

どれもうれしかったし、

つなわたりみたいないな関係に、

勝手に夢中になったのはこっち…。

私達はあなたをととても愛してしまった。

あなたのいいかげんな言葉は、

未来を信じる気持ちに拍車をかけて、

側にいる時も居ない時も、
そのキスは、その先の出来事を想像させた。

いつも会いたくてたまらなかった。

私は彼女にきつと見透かされているんだ。

私が二人にしている事は、

どんなにずるい事だったのか、

私も彼女も知っている。

怖い…。

逃げていた。

彼女から…。

彼に突き放されるのも…。

だから、理解があるフリをして、

あの子とは違うって言って、彼に近付いて、

でも本当は同じ事だったんだ。

きつと彼だって解ってた…。

怖いよ。

本当は彼を好きになる資格なんて私は持っていなかった。

あの、灰色の空気がまた肺を埋め尽くして、

海底にいる魚みたいに、

あなたとはもう二度と会えない所に行かなきゃいけないのは…。

本当にたまらなく悲しいよ。
怖いんだ…。

あの大好きな沢山の思い出達は、
私の中ではきつと、もう二度と手に入らない宝石の様な記憶なのに、
残らず捨ててしまうのも、
あの子にあげてしまうのも嫌だよ…。

言わないで…。

解っているの。

ずるくて、幼くて、いいかげんで、
無理もない。

こんな私が彼を彼女から取る事なんてできない。

最初から知っていた。

なのに何で？
いつの間にこんなに彼に依存してしまったの？
どうして見返りのないこの恋にこんなに夢中になったの？

優しい彼のあいまいな言葉達。
私達二人を好きだと言って夢中にさせた。
とても罪深い彼。
だけど嫌いになれないの。

なんで???

なんで？

…なんで？

もしも...?

邪魔者は誰だ。

亜子のスプーンがすくう、

キレイな緑色、

それからミクのの前には鮮やかすぎる程のピンク。

「亜子って何か渋いよね…。」

私の言葉に亜子はすかさず反論する。

「何言ってるの！！あんたこそ何そのド派手なかき氷。意味解らん。」

亜子のスプーンがミクの氷をすった。

「ハイビスカスだよ。かわいいじゃん。うまいでしょ？」

「うーん、まあまあ。でもおいしいって言う割に全然食べてない。」

そう言っただけまた宇治金時を食べ始める彼女。

それを見ている私。

何かとても蒸し暑くて頭が回らない午後だ…。

でも、どこかで変な汗がずっと出てる気もしてて…。

あー尋常じゃないってこーゆう事…???

机にはピンクの染みが広がって行く。

「食べないの？溶けてんだけど…。」

「あー、うん。」

はっきり言って上の空だった。

亜子がひじをついてため息をつく。

「やっぱりもう帰ろっか。こんな事してる場合じゃないっしょ。」
「えー!」

亜子は私の事を呆れた顔で見ている。

「もう…少しだけ…お願い!」

彼女は首を横に振る。

「だって、リュウタくん在家電かけてって言ったし、いつまでも携帯OFFはまずいよ。」

あの女今頃怒って電話かけまくってるだろーし。」

二人は電源の切れたままの携帯を見つめていた。

「やっぱ…電話出るしかないですかねえ…。」
「まあ、そうなんじゃない?」

亜子のあきれ顔は私を不安にさせた。

解ってるんだ。

ずるいのは私だって…。
だけど…なんか。

さっそうと帰り支度をする彼女を横目に、
私もしぶしぶ席を立った。

(彼女が怖い。自分のして来た事、それを認めるのが、怖い…。)

「避けては通れないんだよ。覚悟してたんでしょ？」

「そう…(なんんだろうか?)」

「大丈夫、リュウタくん彼女と別れたって言ったんだもん。あんたを選んだんだよ。」

亜子の弱い口調は頼りなく聞こえた。

お互いそれ以上言葉もなく私達は店を出た。

外はやっぱり蒸し暑くて、

町は夏の始まりにざわめいている。

だけど、私の体は冷たく冷や汗は止まらなかった。

リュウタは確かに彼女と別れたって言ったけど…。

でも、私とつき合うなんて一言も言ってないんだもん。

よく考えたら、信じる信じない以前に、

カンジんな彼の気持ち…はつきり解んないままだったんだ。

彼を信じられるわけない。

でも私達は口に出せなかった。

駅へ向かう足取りは二人共重い。

「大丈夫だから、どー考えたってあんな女誰も選びませんから!!」
背中を押されて電車に乗って、
手を振る彼女が小さく消えた…。

それから私は電車に乗って、
流れる景色をいつもより早く感じながら、考えていた。

（亜子は“あんな女”って言うてくれたけど、
本当は彼女はやっぱりただの被害者なんだよね…。
リュウタも中々ズルいけど、
でもやっぱり私が一番最悪かな…。
もうどうか遠くの町に逃げてしまいたいよ…。）
なんて。

電車の壁にもたれかかって、静かにその場につづくまる。
良くない考えばかりが頭をかすめて胸がいつぱいになる。
本当の“邪魔者”が誰なのか…。

たぶんもう全員が解ってる…。

リュウタにも…そう…

思われてる…??

辛い事だ…。

（それでも私を選んでくれたらいいのに…。）
頭の中はそれだけだった。

家に電話を入れると、
7時近いのにやっぱり彼からのやっぱり電話はないと言われた。
でも手に汗がにじんで、やっぱり携帯をONにできない。

コレじゃ駄目…もう逃げられないのに！…！！

とりあえず私は、重い体を引きずる様に、多香子の家に駆け込む事にした。

一連の事情を多香子に話して、携帯の電源を入れなくちゃ。

ミクは駅に着くと、すぐさま原付きにまたがった。

「もしもし？多香子？今から行つていい？」

「どうしたの？何かあった？」

「うん…リュウタの事で話があるから、すぐ行く。」

多香子はだいたい察していたんだろう。

返事はイエスだった。

それからすぐに彼女の家へと急ぐ。

リュウタの家から近いその道のりは、

いつもと違ってとても暗く感じた。

部屋に入ると、多香子は心配そうに私を見た。

「で、何かあった？」

私はまるでダムが決壊したみたいに多香子に全部話した。

不安に思つて来た事、昨日の夜の彼の態度、

彼女からの着信や、彼になりすました彼女からのメール。

怖い気持ち…

きつと多香子もおどしていいかなんて解んなかったと思う…。

迷惑かけてごめん。

心の中でそう思いながらも止められなかったんだ…。

多香子はうんうんと静かに話を聞いてくれた。

不思議な物で、心が落ち着いて行くのが解る。

(あー私って駄目だなあ…。)

多香子が静かに口を開く。

「そうか、それは辛いね。彼女マジうざいね。」

「ね。」

本当はそんな事言えた立場じゃないんだけどね。

それからやっとなり携帯の電源を入れる事にした。

「いつから切ってたの？携帯。」

「昼からずっと。何回か女から電話あったから。」

「って、事は…またくるよ？あんた大丈夫？」

「うん…(ううん…)」

もう後戻りはできない。

「行くしかないでしょ。」

「うん、他に道はない！」

電源を入れる。

予想通りすぐに着信があった。

“リュウタの携帯”

もちろんその相手が彼じゃない事はすぐに予想がつく。
でも…

「出るしかない…よね。」

「うん、頑張れ。」

体中から冷や汗がまたあふれだして、手が震える。
電話を取って、静かに耳に当てて、

…聞こえてくる。

さっきと同じあの声だ。

私の知らないリュウタを独占してる女の…

甲高くて、耳障りで、
一生きつと忘れない。

その声の持ち主は、
やっぱり…

千理、リュウタの彼女。

あの子と私の一時間

「もしもし、パンダちゃんかな？」

むかつく。

たぶんそれはあたしのアドレスの中にpandaって文字があるから。

見透かされてるといっつか、馬鹿にされている。

わかる。

彼女：どうしてこんなに余裕なの？

わたしには余裕なんて残されてなかった。

受話器を持ちながら手が震えていた。

(助けてよりユウタ：あなたは今どこにいるの？)

「何？なんであんたがこの携帯で私に電話してくるの？彼はどこにいるの？」

ミクは千理に負けないように、必死で平然を装った。

千理はもちろん余裕で返す。

「何でって千理はリュウタくんの彼女だからにきまってんじゃない？リュウタくんがどこにいようがあんたに関係ないし、どうでもいいじゃん。」

千理はくすくす笑って言った。

胸の中がざわざわして頭に血がのぼる。

「リュウタ昨日、彼女と別れたって言ってたよ。それにだいぶ前から別れたいって言ってた。」

(どうだ!)

言っっちゃった! って感じだった。

実際ミクが彼女だったらこんな事聞い、て、彼とこれ以上どうこうしたいと思えないだろう。

彼が私と会っていた事、昨日の夜の事、その上こんな事を前から言っているんだよ?

傷つけばいい。

早く彼を嫌いになつて、どっか遠くに行っっちゃえばいい。

もうどうでもいい、

あんたが邪魔なの。

どっか行っっちゃえ!!

私はどんな嫌な奴になつてもかまわないと思った。

彼が好きになつてくれるなら後はもういらな思っただ。

千理はそんな事で同じる女じゃないのに…。

強がった。

「リュウタくんがそう言ったの？」

千理が不機嫌そうに聞いた。

「そうだよ、携帯勝手にいじられるの嫌だしわがままだし別れたいってー！」

ミクは震える声で返した。

「ふーん。あ、そう。」

千理はさらりと聞き流す。

ミクのイライラはピークに達していた。

(何この人…どうしてこんなに平然としていられるの？私が電源を切っていた数時間の間に何があったの??)

どんなに平然を装ったところで、動揺を隠せずにいた。

胸の奥に広がる不安…。

どうして…??

駄目だ…。

気が付くと、ミクの頬にはぼろぼろと涙がこぼれていた。

こんなところで負けられないのに…!

胃がきりきりと痛み始めた。

彼女の声、数時間の間の出来事、何もかも、理解できなかった。

「ミク、大丈夫？」

受話器に耳を近付けながら、多香子もテンパっていた。
答えられずにいる私に、千理は言葉を続ける。

「リュウタくんに全部聞いたの。そりゃショックだったよ。やつば信じてたし、まさか何？そんな風に二人で会ってたなんて想像もしてなかった。千理の事とか相談してるうちに何かよくなっちゃって？冗談じゃない！！でも千理別れる気ないしリュウタくんの事許してやり直すからもうかかわらないで！！！」

千理が強い口調で言った。

ってゆうか相談してた？って何？

リュウタは確かにずっと彼女と別れたいって言っていた。

でも相談なんてされた覚えは一度もない…。

よく解ないけどそういう事になっているらしい。

ずるい男。

それでも私達は彼が好きだった。

彼の嘘に振り回されて、傷付いて、

それでも彼が好き…。

手放すなんてできない。

「あんだだって人のメールとか見たくせに…。」

千理がぼそつとつぶやいた。

「…。」何も答えられない。

「何とか言ったら？」

「…初めは…二人を邪魔するつもりじゃなかった。ただ、好きで友

達としてでもいいから、もう一度会いたかった。でも今は、私も本
当に彼とつき合いたいと思ってる。」

「何それ？会ってる時点でもう邪魔だし、もう一回なんて、虫が良
すぎるんじゃない？」

確かに千理の言ってる事は間違っていない。

それでも今ここで引いちゃったら、彼と私はもう…。

「彼と話したい。彼を出して。」

「絶対嫌。」

千理の強い口調はミクの弱々しい声を遮った。

「もともとあんたがリュウタくんを捨てたんでしょう？それを私が
もらったの。もうあんたにリュウタくんを渡すつもりもないしあん
たにはそんな権利ない。」

「……………」

「千理はリュウタくんを離したりしない。千理はリュウタくんと結
婚する。もちろんあんたはその式にも呼ばれない。どっかで他の誰
かと幸せになればいい。もう二度と私達の邪魔をしないで。」

リュウタとの将来を語ってみせる千理を心から憎いと感じた。

多香子も黙ってそれを聞いていた。

千理の言っている事は否定する隙もないくらい正しくて、

私の考えたくなかった現実をズバズバと言ってくるその態度も、
強くて、自信に満ちていて、

それだけで、何だか心の中が痛くて、辛くて、

私は途方に暮れていた。

これ以上何を話せばあの過去を、この思いを、清算できるって言うの？

「あんたリュウタくんとやったんだら??」

「…え?」

「やったならやったって言いなよ。いいんだよ、一回くらいどつて事ない。千理、リュウタくんとこれからもういくらでもそんな事できるし今までだってそうしてきた。一回くらいどつて事ないから。」

「やってないよ。」

「嘘付くな!」

千理の口調が強くなる。

「リュウタがそう言ったの?」

「さあ?」

確かに…

昨日の夜…ミクとリュウタは体を重ねてキスをした。

でも、そんな中途半端な状態で、千理とリュウタに比べたら、本当にやったとは言えなかった…。

余計空しくなるだけだ…。

「やってないよ。」

悲しいけどそう答えた。

同時にそれは、ミクの負けを決定付けた瞬間だったのかもしれない。

「あ、そう。」

千理は不満そうに言った。

「千理、電話するまであんたがどんな嫌な女なのかって考えてた。でも、意外と性格は悪くないみたいだし、すぐに新しい恋できると思うよ。」

「余計なお世話だし。」

「まあ、今回は運がわるかったけど、人生は長いんだからさ。これからいくらでもいい事あるって!!」

千理は何だか楽しそうに笑って言った。

彼女なりに強がっていたのかな…。

ミクはそんな彼女がやっぱりムカついた。

どうして？彼はどうしてこの子なの？

どうして私じゃないの??

彼女の声が耳に残る。

心の中に、モヤモヤとした寂しさだけが広がって行く。

また明日から、またあの灰色の景色をかんじるのかな？

自信はなかった。

ただ、一心に彼との復縁を願う気持ちだけがミクの気持ちをかりたてた。

それから堂々回りの二人の会話は1時間くらい続いた。
最後の方はもうあんまり記憶がない。

ミクも千理もただ必死に、自分の事を喋るだけで、

リュウタの気持ちなんて考えられない…。

なんて滑稽なんだろう私達。

悲しい気持ちが広がって行った…。

私は返す言葉を失って、

千理もだんだんと静かになっていった。

そして静かに千理が最後の言葉を述べた。

「どんな女なのかって考えてた。すっげームカついてたし今もムカついてたけど、そんなに性格は悪くないみたいだね。あんたならきつとすぐ次の恋ができるよって事で…。」

「…。」

「まあ今回は諦めてよね。」

「…。」

「残念、無念で、サヨウナラ…。」

ザンネンムネンデサヨウナラ。

私は絶対忘れない。
屈辱的で、悲しくて、こんな思いは、
自分のせいなのにね。

さよならだね。

涙が止まらなかった。

止まらないどころじゃない。

後から後から続いて行った。

昨日の事はもうまるで幻みたいだった。

あんなに嬉しい夜はもう二度と来ないと思ったのに…。

まさかこんな形で現実になるなんて…。

思いもしなかった。

何とか繋がったリュウタとの電話もとても味気ないもので、私の（もしかしたら…。）なんて都合のいい期待もすぐに裏切られる。

リュウタは淡々と落ち着いた口調で話します。

「ごめん、やり直すって話し合ったんだ。もうどんな風に思ってくれても何て言ってくれても構わないから…。」

弱々しい口調…。

でもハッキリ感じられたのは、昨日までとは違う他人行儀なそっけない声だった事。

「嫌だよ…もう会えないなんて嫌だし、わけがわかんないよ。」

泣きながら何度も私は「会いたい」と言う。

リュウタは冷たくそれを突き放す様に、

「駄目なんだ。もう会わない。ごめん。」

そう繰り返すだけだった。

「あたしが電話切つてたからいけないの？エッチでできなかったからいけないの？何で？」

何で？どうして？？

疑問は膨らむばかりだった。

だってそうでしょう？

あんなに期待させておいて、

あんなに喜ばせておいて…。

全部あたしの勝手な一人よがりだったんだ。

みじめで、情けなくて、

消えてしまえたらいいのに…。

リュウタは言葉を濁すだけで、

あいまいで、気持ちがどこにあるかさえちゃんと教えてくれない。

ずるいよ…。

どんな理由でも、言い訳でもいいから、

納得できる説明が欲しいよ。

嘘でもいい、何でもいいから、

ねえ、私から目をそらさないで…。

今、聞かなきゃ。

じやなきやもう二度…

解っていた。

でも、リュウタは、乾いた声で何度も「ごめん。」と言っただけ。

「解った…。」

小さく呟いて私も電話を離す。

何気ない夏の始まりの一日。

だけど私にとってあの日は、
人生が終わったって言うてもいいくらい、

悲しい一日。

あれから

あまりにあっけないリュウタとの出来事から数年が過ぎようとしていた。

結局現実なんてはかない物で、
ドラマや少女漫画みたいに、簡単に再会したり復縁するなんてできず、
もちろんリュウタとも本当にそれ以降出会う事はなかった。

あ後のミクにしても、
ドラマとかならきつと、立派に立ち直って、
彼に再会するなり、自立してキャリアウーマンになるなり何なりしているはず。

だけどね…。

実際のミクはあの後すっかり変わってしまったよ。

ミクは自信をなくして、恋にものめり込めなくなったし、
バンドもバイトも結局しなくなって、友達関係にしたって、
何だか深い関係になって、サヨナラするのが嫌だとか考えられなくなった。

何より、そんな風にしか思えない自分の事は大嫌いで、
これでも色々と努力したんだ。

でもそれも何だか間違った方向に行ってしまったって…。
特に、ミクがああ後一番後悔した事と言えば、

リュウタとちゃんと一回もエッチしてない事…。

恥ずかしかった。

彼女に問いつめられても「してないよ」って答えた。
女として、とても情けなくて、みじめだった。

リュウタとの事が過ぎ、季節が秋の終わりを告げる頃、
バイト仲間のみいちゃんに頼んで、適当に男の子を紹介してもらっ
た。

リュウタと別れた後、ご飯も食べれなかったし、すごく不安定にな
ってて、

やっと1か月、2か月立った…そのくらいの時期だ。

とりあえずミクはその男友達に会って、

「まあ、行く所ないし家行こうよ。」と簡単に声をかける。
彼も彼で、ためらいもせず、私を部屋に入れた。

「前、電話で引きずってる女の子がいるって言ってなかったっけ？」
彼は笑いながら見知らぬ女の子のプリクラをゴミ箱に捨ててみせる。
「何の事だっけ?? 忘れたよ。今はミク一筋だから！」
そう言っつて、ミクの体に手をかけた。

(嘘ばかり…。)

そう思いながら、ミクも彼に手をかけて、

まあ、いつか…。

そうしてミクは処女を捨てた。

ちなみに“初めては本当に好きな人じゃなきゃ後悔する”なんてよく聞くけど。

ミクはヤレヤレって感じであっさりそれを済ませてしまった。

むしろ、コレでやっと千理と同じ“女”になれたなんて考えていたし。

私はまだリュウタを忘れられなかったんだ…。

そんな事しても、

もうリュウタとは体が触れ合う事も、会話をする事さえないと解っているのに…。

彼は軽い口調で言う。

「ミクって本当に初めてなの？そうは見えないけど。緊張したりしないんだ。」

「うん。別に普通だった。」

私もサラリと答えた。

リュウタとは2年もつき合ったのに、ドキドキして全然できなかったし、

再会してからも、緊張して最後までできなかつたって言うのに、

なんて簡単な事なんだろう…。

もっと早くこんな経験をしていれば、

最後の夜もきつと失敗しなかったに違いない。

私は、初めて会ったばかりの人と簡単にしてしまう事より、リユウタとしなかった事への後悔を募らせた。

そしてそんな感じで結局彼とつき合って、
月日を重ねるうちに愛着も湧いて来て…。

だけど結局煮え切らないミクの態度にしびれをきらし、
彼は元彼女と浮気して…

大して悲しいとも思えずにその恋も半年で終わった。

それでも（よく持ったなあ…）なんて考えていた。

もうあんなに傷付いたりはしなかった。

免疫ができているのか、恋ではなかったのか…。

そんな恋愛が、高校を出ても、専門に入ってからでも、ずっと続いた。

合コンとかして、誰かと出会って、恋をして、

電話や、メールで簡単に「好き」とか「嫌い」とか、

リユウタには言えなかった…でも、

自分でも解らないくらい簡単に、いくつかの恋が通り過ぎて行った。

自分の中で言い聞かせていたんだ。

(リュウタはあの日死んじゃったんだ)なんて…。
だってそうでしょう？

夫がもしも行方不明になったら、妻はきつといつまでも家で待つに
違いない。

だけど、未亡人だとしたら、

夫の想い出を胸に、違う人と再婚とかして、それなりに幸せに生涯
を終えるんだ。

きつとそういうもの…。

だからリュウタもあの日、去っていったんじゃない。

死んじゃったんだ…。

ミクは何年もの間、こうしてリュウタへの気持ちを断ち切って来た。
他の彼女を選んだ彼を、待っていてられる程強くなかったし、
人並みの幸せが、私には必要なんだって思っていた。

だけど、現実には残酷な物で、
何度も何度も夢の中でリュウタと会っては悲しい気持ちになったし、
実際にも、コンビにやら、近所の道で、彼を見かけてはため息が出
る。

地元の同級生だから、顔を合わせる事は何度かあった。

(そりゃそうか…)

車校でリュウタを見つけた時も、悲しい事にドキドキして、
すぐにあの気持ちが蘇った。

勇気を出して話しかけると、

彼は何でもない笑顔で、「久しぶり」と笑った。

私はもうあの事は口に出せずに、久しぶりにあったただの知り合い
って感じで、

毎日彼の登校時間にあいさつをし、タマにジューズをおごってもら
ったり、

そんな風にしてるうちに、私は免許を取って、

卒業後は電車にもなくなる…また一つ彼との会う機会を失って、

全然楽しいと思えなかった。

悲しくていつもいつも、あの頃の思い出が胸を締め付けて、汚染さ
れていた。

成人式が近付いていたあの頃も、

本当に毎日が鬱で仕方なかった。

リュウタは来るだろうか…話ができるだろうか…。

緊張しながらも、期待、それから、これを過ぎたら今度こそ最後。

この気持ちにピリオドを打たなければと、プレッシャーを感じてい
た。

そしてその日、友人や昔の担任との再会が嬉しくて、私は気分が良
かった。

リュウタもちろん来ていてホッとした。

少し髪を短くして、スーツを着た彼はとても落ち着いて見えて、

また私はドキドキしていた…。

彼の性格はもう何となく解る…。

話しかけてくるわけ絶対ない。でも…

こっちが笑顔で話しかければ、何事もない態度で会話してくれる。ミクはカメラを持ってリュウタに近付いて「撮って。」と言った。

「え？別にいいよ。」
嬉しいとも迷惑とも取れない強張った笑顔でリュウタは私の横に並ぶ。

過去につき合っていた二人のぎこちない写真は、ミクの宝物になった…。

その後の飲み会でリュウタと会った時、二人きりにもなれたけど、怖くて何も言えなかった…。

「彼氏できた？」

何気ない彼の質問に、

勝手に期待して、顔が赤くなった。

でも…

もう…今更…

気持ちは伝えられずに、
どうでもいい仕事の話とかして、
飲んで、リュウタが帰る頃には、

もう、どうしようって

ミクの中にはいつもいっしょでこいつがいるんだろって。

だけと言えなかった…。

そんな事を繰り返したまま、

もうあの18の夏から四年目の夏を迎えようとしていた。

ミクの元に届いた1通の手紙。

岡山に済んでいる透子からだった。

“ミク、元気にしてるかな？

サロンやめたんだって？ビックリした。

透子はこつちで赤ちゃんを生んだよ。驚いた？

赤ちゃんの写真送ります。ミクにもいつかそんな日が来たら写真送ってね。”

ミクは赤ん坊の写真を見て微笑んだ。

四月に専門学校を出て、ミクはエステティシャンになった。

研修の為一時的に大阪で暮らす事になり、透子はその時一緒に暮らしたルームメイトだ。

今でも時々連絡を取ってはたわいもない近況を報告しあう。

大阪ではすごく仕事が辛かった反面、都会で、刺激があつて、

友達もまた、皆県外で、言葉もバラバラだし、そんな環境の中で、皆深い仲になれたし、地元の友達には言えない様な話もいっばいできた。

透子はその時、6年になる彼がいると言っていた。

奇麗で、いくらでもモテそうなのに、ついにその彼と結婚したと言
う。

「途中で他の人好きになったりもしたよ。彼と別れるわけでもなかつたのに、すぐはまっちゃってね。結局我慢できなくて1年後に告白した。何したいんだお前的に言われてさあ、そりゃ返事する方だって困るよね。でもすつきりできて迷いもなくなっただけだね。」
そう言っ透子は缶ビールを片手に笑っていた。

懐かしいなあ…大阪。

私は窓をあけて夏の気怠い空気を感じていた。

新大阪のマンションにいた頃、9階のベランダは夜になると夜景が奇麗だった。

普段は飲まない私も、透子とよく乾杯したもんだよ。

そんなに昔の話じゃないのに、透子はもう知らない町でお母さんが…。

はあ…。

ため息が出た。

多香子もいつの間にか、昔引きずっていた彼を忘れ、
今は職場の先輩と一途につき合っている。

亜子や菜穂もそれぞれ進学して、目標を持っているみたいだ。
大樹も仕事に燃えていて、

皆、皆、変わって行った。

きつと、

リュウタもあたしの知らない所で知らない大人になっているんだろ
う。

私だって変わらないわけじゃない。

実は私にも、つき合ってもうすぐ3年になる彼がいた。

今までの恋愛に比べたら、穏やかで、とても落ち着いた関係にある。
ただ、心の中で、リュウタを忘れていない自分に罪悪感を感じてい
ないわけじゃない。

だけど、今の彼とは、

あの頃とは違ったもつと穏やかな恋愛以上の事をきつと得られる。

だから3年持った…。

だけど今でもやっぱり解らない。

自分が誰とこの先恋をしたり結婚したり…子供を産んだりとか…？
??

同級生達はどんどん結婚して家庭を築いて、

きつとリュウタだってそのうちそんな日を迎えて…。

私はその時どう感じるんだろう？
私はどうなるんだろう？

幸せな毎日を過ごしながら、
今でも切なく思うんだ。

それはもう2度と戻らないあの夏の日の話。

短い恋の物語。

最後に。

こんにちは。

アシンメトリーをここまで読んでくれてありがとうございます。

この章はあとがきになります。

とりあえず全部書き終えられました。

気持ちに整理が着いたかは謎ですが、とりあえず終了！

ちよつと寂しいです。

この話は実際に私が高校生の時の事を書きました。

登場する人物も全部実在しています。

ただ、私一人の主観と、覚えている限りの会話や情景であって、本人達が何を思ってたかなんて知りませんけど！！！！（あはは。）

この話を書いて、

自分で読み返して、本当に本当に、

沢山の事を今も覚えていてる自分にびっくりします。

あの恋は終わってしまったって、

私は絶対に忘れないし、

彼を嫌いになる事もないでしょう。

例え今、この先、誰が隣に居ようとも変える事のできない、とても思い入れのある過去の大切な出来事です。

本音を言ってしまうば、

今更でも何でも、一度彼と会って、
もっとあの時はどうだったとか聞ければもっとすっきりできるけど、
彼はもうきつと全部忘れちゃったんだろうな。
どんなに大事に思っても、私の記憶の中だけにしかない、物語みた
いな物かもしれない。
だから、今はもう彼と会う事はありません。
会ったとしても怖くてそんな話できんだろう!!とか思うし、
何より、今ある幸せをぶっ壊すのはどうだろう…疑問です。

ただ、あの数カ月間の事を、
私はずっと覚えていたい。
あんな風に誰かに執着できたのはきつと若かったっていうのもあっ
て、
大人になっていくこれから、あんな激しい気持ちを感じる事はきつ
ともうないから…。

何だか現実ってシビアだよな。
もう戻れない昔の事に輝きを感じたり、
今に不安を感じたり。

ただこの話を、一人でも誰かが読んでくれて、
時々思い出してくれれば寂しさも和らぐと思います。
私の気持ちを誰かが知ってくれている。
その事がとても励みになるし、救われます。
一人じゃない。それを確信できる。

そしていつか、
彼とまた出会って、
何でも無い話を普通にしたいなと思う今日この頃です。

尊いけど思い出は時に悲しい。
そんなこんなな感じですね。

最後に…この話を読み切ったよ！って方、
お気軽にメッセージ下さいね
感想待ってます

アドレス書いてもらえたらもちろん返事かきます。
(ただし、文法とか小説としての評価は素人だから許して下さい、
涙)

では、またどこかで…!!…さようなら~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0485a/>

アシンメトリー

2010年12月13日20時35分発行